伊勢國能褒野墓決定勘註

ル 3
3007

八年十一月廿五日回

賦

丞　出仕

諸陵課

龜山陵寢所兩墓處分方之義ニ付

正院ヘ伺案

先般當有官員之者龜山御墓陵寢所御
墓処視検査ノ上別試勘註二冊差届申
二葉取調差出候處右該墓之儀ハ御貴
地ニ無論御場所ト相考候條墓之儀ハ御貴
置處分方取計可然哉至急御指揮有
之度此段相伺候也

宮内省圖書寮文庫

宮内省圖書寮

ル 3
3007

去水五味均平藏

八年十一月廿五日回達

諸陵課

輔

丞

出仕

●

龜山能褒野両墓處分方之儀ニ付

正院ヘ伺案

先般當有官員之者龜山御墓能褒野御墓巡視檢査ノ上別紙勘註二冊繪圖面二葉取調差出候處右該墓之儀ハ御實地ニ無紛御場所ト相考候条墓掌丁差置處分方取計可然哉至急御指揮有之度此段相伺候也

宮内省

大臣宛　輔

左ノ通

紀伊國竈山御墓保護國費

野墓之同前

[illegible]

也同様調査之上別紙勅任毎

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

伺之通

明治九年一月九日　太政官

十月五日達ス

諸陵寮印

候義

有之

和歌山縣

其縣管下紀伊國名草郡宮郷和田村彦五

瀬命竈山墓ヽ掌丁差置取締可致兆域価

諸陵寮印

九年一月廿日回

輔 諸陵課

丞

龜山墓能褒野墓掌丁被付置候義ニ付議案

別紙之通正院ヨリ御指令ノ次第モ有之候条左之通御達有之ハ如何

達案

其縣管下紀伊國名草郡宮郷和田村彦五瀬命龜山墓ニ掌丁差置取締可致兆域廻

和歌山縣

伺之通
明治九年一月十九日
太政大臣三條實美印

界之義ハ區別見込相立當有ヘ可伺出此旨
相達候事

和田村竈山墓之儀ハ彦五瀬命御墓ニ付自今掌丁
云〻

正声 (歴定)

一月廿二日 (往復)

三重縣

即日発ス (正声)

其縣管下伊勢國鈴鹿郡高宮御高宮村
日本武尊能褒野墓ニ掌丁差置取締可
致尤兆域經界ノ義ハ區別見込相立當有
ヘ可伺出此旨相達候事

但掌丁申付候ハヽ人名届出事

高宮村能褒野墓之儀ハ日本武尊御墓ニ付
自今掌丁云〻

正声 (定立)

(七大)

竈山能褒野両墓處分之儀ニ付伺

紀伊國竈山御墓伊勢國能褒野御墓御場
所之義ニ付從前異説モ有之処先般當有
官員巡回検査ノ上別紙勘註二冊繪圖一面二
枚取調差出御實地無紛相見候条掌丁
差置守衛可為致ト存候ヘトモ為念伺候
相伺候也

明治八年十二月五日

教部大輔宍戸隆

太政大臣三條實美殿

伺之通

明治九年一月十九日 (太政大臣三條実美印)

伊勢國鈴鹿郡高宮鄉高宮村

能褒野墓實檢勘註

伊勢國鈴鹿郡

能褒野墓

景行天皇紀四十年夏六月東夷多叛冬十月壬子朔癸丑日本武尊發路之云々逮于能褒野而痛甚之則以所佩蝦夷等獻於神宮因遣吉備武彦奏之於天皇曰云々既而崩于能褒野時年三十天皇聞之云々即詔羣卿命百寮仍葬於伊勢國能褒野陵時日本武尊化白鳥從陵出之指倭國而飛之群臣等因以開其棺櫬而視之明衣空留而屍骨無之於是遣使者追尋白鳥則停於倭琴彈原仍於其處造陵

焉白鳥更飛至河内留舊市邑亦其處作陵故時人
號是三陵曰白鳥陵然遂高翔上天徒葬衣冠因欲
録功名即定武部也是歳天皇踐祚四十三年焉
古事記自其幸行而到能煩野之時思國以歌曰云
云此時御病甚急爾御歌曰云々歌竟即崩爾貢上
驛使於是坐倭后等及御子等諸下到而作御陵即
匍匐廻其地之那豆岐田而哭云々於是化八尋白
智鳥翔天而向濱飛行爾其后及御子等於其小竹
之苅杙雖足跣破忘其痛以哭追云々故自其國飛
翔行留河内國之志幾故於其地作御陵鎮坐也即

號其御陵謂白鳥御陵也然亦自其地更翔天以飛
行
熱田宮寛平縁記倭武尊體中不豫欲歸尾張便移
伊勢到尾津濱云々逮于能褒野異常委惙云々既
而過鈴鹿山病痛危迫故歌曰云々渡鈴鹿河中瀬
忽隨逝水謂崩也時羊三十仍號其瀬曰能知瀬能知者命
終之詞也今改為長瀬訛也云々仍葬伊勢國能褒野時
倭武尊化白鳥從陵墓指大和國而飛去云々
諸陵式能褒野墓日本武尊在伊勢國鈴鹿郡兆域
東西二町南北二町守戸三烟

臣等謹按ニ此ノ皇子ノ御陵ハ伊勢ノ能褒野ト倭ノ琴彈原ト河内ノ志幾ト三所ニ作ラレタル事古ニ引ル御紀ノ文ノ如シ」仲哀天皇紀元年冬十一月乙酉朔詔群臣曰ク朕未逮ニ于弱冠ニ而父王既ニ崩之乃神靈化白鳥ニ而上天ニ仰望之情一日勿息是以冀獲白鳥養之於陵域之池因以覩其鳥欲慰顧情則令諸國俾貢白鳥ト見エタルハ琴彈原ノ陵ナルベシ」又仁德天皇紀六十年冬十月差白鳥陵守等充役丁時天皇臨于役所爰陵守目杵忽化白鹿以走於是天皇詔之曰是

陵自本空故欲除其陵守而甫差役丁令視是怪者甚懼之無動陵守者則且授土師連等ト見エタルハ志幾ノ陵ト聞エタリ」又續日本紀大寶二年八月癸卯震倭建命墓遣使祭之ト見エタルハ三陵ノ中何レノ陵カ審ナラザレモ先ハ能褒野ノ陵ナルベク考ヘ奉ラル」サテ古ノ如ク三所ニ御陵ヲ作ラレタレド後代マデモ伊勢ノ能褒野ヲ本陵ト定メテ年々ノ荷前ヲモ奉ラル、御例ナル事諸陵式ニ見エタルガ如シ」然ルニ此ノ能褒野ノ陵御在所詳ナラザルガ如ク

ニテ今工人是ヲ御實蹟ト稱スル所二箇所アリ其一箇所ハ鈴鹿郡高宮郷高宮村ニ丸山トモ茶磨山トモ大經塚トモ白鳥塚トモ鵠塚トモ稱スル小山是ナリ又一箇所ハ同郡長瀬郷長澤村ニ二子塚トモ二子穴トモ稱スル古墳是也（此外ニ此長澤村ノ中ニ武備塚ト稱スル古墳アリ此墳ヲ能褒野陵ト定タル説モアレド其ハ決メテ非ナル事先輩ノ論ヲ擧テ次下ニ委シク辨ゼリ）臣等今度高宮村長澤村ノ二所ヲ巡視シテカノ丸山二子塚兩所ノ形勢ヲ實檢スルニ高宮ノ丸山是眞ノ御陵ナルヿ疑無ク考ヘ奉ラル近年カノ二子

塚御實蹟ナル由ヲ論ジテ累リニ其説ヲ主張スル者アリ此ニ依テ土人ヤヽモスレハ爭論ヲ釀スニ至レリ依テ先始ニ能褒野ノ地理ヲ辨ヘ次ニ彼丸山二子塚現在ノ形容ヲ圖シ（但シ圖ハ別紙ヲ以テ製ス）見聞スル處ノ衆説ヲ擧テ例ノ愚勘ヲ註スルヿ左ノ如シ

能褒野

古事記傳廿八（倭建命條ニ）崩能煩野ヲ伊勢國鈴鹿郡なるかゝ諸陵式ヨリ見えて下ヨリ引ヲ煩濁音なり書紀には褒字を作れども濁て唱るはわろし（ニ斗）此野ヲ今其地形を見

ほり大なゝ鈴鹿郡の北の方は半なも過て皆野な
る其内は村里も数多なり田畠れは地も多の様
ども又遥々と廣き曠野なる處々も多くして
爲て一連に大野なして上代のさはわたりしもなる當郡の
東西の極まで〻と接る西の方は漸くに高くして
ろどころ卒なる高き所も有るけれは所も低き方なを望まむ山の如く
なて登きむ上へも又平なる野なり万葉に山邊の
五十師原と有る地も此野の内の東の方なて東よ
を登る所も山なて上へは平なて西へ廣き野なり
なほ其地の事も別なを委き考へなを漸なを登る地な様も名義登を野
（六大）

なる爲しかくゝ西の極は高山並連きて近江の國の堺也
其中は野登山と云なりて最高し是も野より漸なを
登は故の名歌はべしけて此野の名今は各所な
て或も廣瀬野と云と或も鞠野とも云てて様ら
は總ての名とも聞えぬを古へは能煩野と云しは
大名なてでなりけむ此名は今は土人なも知らざる様り
背書國誌ト云書伊勢國松本村古谷久吾著ニ横山維中同國菰野
村ノト云人ノ説ヲ載テ云采女村今杖突坂ヨリ
上鹿間川ヨリ南御贄川ヨリ北小岐須山本大久
保ヨリ東鈴鹿川ニ到リ渾テ一面ノ大野ニシテ

大野ノトモ云能褒野トモ云其後羊ヲ追テ村落開ケテ各地界ヲ分チ或ハ武日野鞠ガ野廣瀬野等ノ小名モ品々アル也武日塚モ白鳥塚モ共ニ能褒野ノ中ニアリ云々

臣等巡視ノ日ニ當テ此廣野ヲ經歷スルニスベテ古事記傳ニ云ヘル趣ニ違フ事無ク登リ野ノ名義モ信ニ然ルベク聞エタリ彼高宮村ノ丸山モ長澤村ノ二子塚モ共ニ此野ノ内ニ在テ東西凡二里許リヲ隔テタリ記傳ニ能煩野ノ名ハ今ハ土人ナドハ知ラズトアルヲ今度巡

視ニ臨テ村老ニ問ヒ試ムルニ高宮村ニテハ彼丸山ノ邊ヲ能煩野ト稱シ來レル趣ニ言ヒ成シ長澤村ニテハ彼二子塚武日塚ノ邊ニ能褒野ノ名遺レルサマニ言成スハイト心得ヌ事也此ハ近年村落ニモ書籍ナド讀ム人多クナレルニツキテ自然能褒野ノ古名ヲ聞知リテ强ニ己ガ方ニ引付ムトハスルナルベシ其ハ此能褒野ニ限ラズ此類常ニアル事也ヨクセスバ欺ムカレヌベシ

鈴鹿郡高宮鄉高宮村

丸山或ハ茶臼山或ハ大經塚或ハ白鳥塚或ハ鵜塚トモ称ス石藥師ノ驛ト莊野驛トノ間大道ノ北ノ方十町余ノ所ナリ

古事記傳廿九能煩野ノ陵の下ニ陵は今はちゞかなら祢
ど高宮村と云ふ丸山と云あり茶臼山とも経塚
やも白鳥塚とも云て甚大ふ高く圓ふして周ふ
堀の形なやもかすゞ残ゐて全上代の御陵ども
の狀なりまづは此ならむとぞおほゆふ谷川氏も今高
宮村ふひよやゐ塚と云あり能煩野ノ御陵む此形
なべしと云ゐ此ノ塚のさやを形り又或人も御陵む
此ノ塚なりやして此ノあゝゐと高宮ノ郷ふして高飛野
と云此ノ白鳥塚のほやゐの地ふ玉ノ子ノ田實ノ冠ノ塚形
ど云字もなゐ又七八町むかゐ北ノ方ふ御ノ所ノ垣ノ内
やも云田地の字もあり て土人鑊を入なやも祓む
崇ありと云ニ傳へ多ふ地な
どもあふ形りと云ゐ云々
熟田縁記参考秦鼎説ニ武尊崩能褒野ニ今此野難も

定何地ト土人亦不知其名ヲ或云莊野石藥師ニ驛ノ間
有茶臼山疑是此陵一説能褒野ハ即莊野也云々能
褒者能褒利也即升之義古作升野ニ今訛為莊野ト以
升莊邦音近故
五十鈴遺響ト云書此書何人ノ作ナルカ尚可尋日本武尊ノ御陵
庄野驛ヨリ十丁許東高宮村ノ南ニ椎山ノ山脉ニ
續キテ一堆ノ山丘アリ形圓ニメ上下二段ニ重
疊テ茶臼ニ似タリ方俗茶臼山或ハ丸山或ハ経
塚山或ハ鵜塚ト云是白鳥陵ナリ北ハ廣瀬野ニ
續キテ馬鬣封ノ威儀遺レリ高十八間東西廿五

間南面ニシテ此、地ヨリ往年曲玉及埴輪甕壷ノ類ヲ掘出セシ事アリ是能褒野ノ葬陵也云々

加佐登、杜由緒書（高宮村神職鈴木信重註進）ニ伊勢、國鈴鹿郡高宮、郷高宮村鎮座加佐登、杜所祭日本武、尊是の大神を祭れ留故由なき此地能褒野の内なる高宮郷なて杜の後の方なる白鳥陵なる是日本紀なる云々諸陵式なる云々此、陵高さ麓より頂まて十八間余廻り凡三百間余あり又こ此近き邊なる御車塚、寶冠塚、寶裝塚、玉、塚、玉、子、田、なとなりて皇子、尊なる故なる事なり云々是の御陵近き岡山なる皇子の御笠

を埋めてこ此神御靈を齋祭まて加佐登、杜と稱へ奉る云々

御笠殿由来記（文政十二年九月神職鈴木信房ノ需ニ應シテ平田篤胤ノ撰也但シ州本）ト云書ニ伊勢、國鈴鹿、郡莊野、驛なる十町ばかり北なる高宮村といふ所なる御笠殿、て日本武尊の御社なりこは尊の御笠を藏ゑし所と語りつぎまた其よりや、放きて白鳥塚、て同じ尊の御陵なりこ此邊わ、一な面ていなる、へ能煩野、といひ、所なてか此玉の崩御ませる地なる故なる御陵なる事なり延喜諸陵式なる云ことあるも是なりなほ

其ほかあまたに奉冠塚奉裝塚などゝ云ふものあるは皆
あれ玉の御遺物を納めし所といふも信まことに然る
事ゝ云々

臣等此地ヲ巡視スルニ莊野驛ヨリ北ノ方高
宮村ヲ過テ凡十町許ニシテ椎山ニ至ル常葉ハ
木生茂リタル中ニ椎ノ木最多クウルハシキ岡
山也此岡ノ頂ニ御笠殿ト稱スル社アリ此社地
ノ後ノ徑ヲ北ノ方ヘ廻リ出レハ又平地アリ
圓形ノ小丘屹立セリ是レ即チ彼ノ丸山トモ茶臼山
トモ唱ヘテ御陵ト稱シ来レル山也臣等謹テ

御山ノ形容ヲ拜スルニ高サ凡十五六間許リ裾
ノ廻リ凡二百間許リト見エタリ山ノ全體小石
交リノ赤土ニテ天然ノ質ニアラス全ク人造
ノ山ナルヿ一目瞭然タルガ上ニ山上山下押
ナベテ一面ニ黑キ小石ヲ以テ菅覆ヘルサマ古
陵ノ體裁備リテ更ニ疑ヲ容ルベキ所無シ山
ノ東面ハ壞レ損ハレテ全カラズ往年曲玉埴
輪甕壷ノ類出タル事アリト聞ツレバ土人ニ
尋問フニ如此ト慥ニ答フル者無リキ古事記
傳ニ周ニ堀形殘レリトアルハ山ノ西ノ方ノ

ナダレタル所ニ近来塑キタリト見エル田面
アル此レラノアタリヲ云ヘルニヤ東ノ方モ深キ
谷アリテ椎山ト境ヲ成セリ此モ堀切ノ跡ト
モ云ベキ形勢ナリ」サテ試ニ東西二町南北二
町ノ兆域ヲ測ルニ周廻悉ク山野不毛ノ地ナ
レバ聊モ障ル所無シ」又記傳ニ鈴鹿郡なる石
藥師寺を高冨山と號く高冨ハ高飛なて此あ
ありの舊名なて石藥師驛も舊名高飛と云へる
其ハ倭建命の白鳥と化て飛去坐しより起れ
る名なりと云傳ふト見エタリ」石藥師驛ハ高

宮村ノ隣邑ナレバ巡視ノ時コレヲ土人ニ尋
ルニ石藥師村ノ舊名ヲ高飛村ト云シイハ文
禄三年ノ檢地帳ニ見エテ慥ナルイ也ト云ヘリ
因ニ云倭ノ琴彈原ノ白鳥陵ハ葛上郡冨田村ト原
田村トノ間ニアリテ此冨田モ飛田ノ義ナル由土人ノ
説ナリ然ル時ハ石藥師寺ノ山號高飛ヲ高
冨トモ書来レルハ其意バヘ東西相適スルニ
似タリ又此高宮ノ郷ハ和名鈔ニモ見エテイト古
キ郷名ナルニ此ノ地ハ景行天皇東國巡幸ノ時
ニ暫ク皇居トシタマヒシ綺宮ノ蹟ナリト土
人ノ傳ヘタルハ信ニ然アルベク才ボエ御所
垣内ナド云字ノ今世ニ遺レルモ全ク其ノ御舊

蹟ニヨレル名ナルベシモシ然ル時ハ是又大ニ
御陵ニ由縁アリ其ハ御紀ニ五十三年秋八月天
皇詔羣卿曰朕顧愛子何日止乎冀欲巡狩小碓
王所平之國是月乘輿幸伊勢轉入東海云々十
二月從東國還之居伊勢也是謂綺宮云々五十
四年秋九月自伊勢還於倭居纒向宮云々トア
ルヲ熟考シテ御由縁深キ地ナルヿヲ曉ルベ
ケ就テハ此高宮村ノ丸山正シク能褒野陵ナ
ルヿヲ思ヒ決メ奉ルベシ

○

鈴鹿郡長瀬郷長澤村

二子塚或ハ二子穴トモ云

古事記傳廿九能煩野陵の下ニ長澤村ナル武備塚ノ事
ヲ論ヒタル文ノ續ニ又右の長澤村の少西南方
の野中ヨ高さ一丈ばかりまり周ヨ十丈許りもあらむ
と見ゆる古塚あヨ東面ハ半腹の土崩きたる所
ヨ穴ありて石構ハ口顯きこヨ口は狹くして穴
の内は奥へ八九尺横七八尺ばかヨあて上ハ大石
を覆ひ横も石を重ねて構へたヨ是を里人二子
塚とも二子穴とも云ヘヨ其邊ハ大いかーこヨ大石ど

も此地ハ埋れこるおいさゝ、の顯ハ多るも幾つも
あるハ此も此ノ塚の石搆の散多る形る亟一又此冢
の西ノ方ハも今一ッ冢あるを抑、此二子塚ハ正〻〻く上
代の貴人の墓ヤハ見え多るされど此ハ御陵と
は定がゝ一或人大碓ノ命小碓ノ命雙生ハ坐ましせバ
此ノ塚ハ名由なるを又長澤村ハ長瀬ノ神社あり其ノ神
像ハ背の長き御像なるといふも倭建ノ命御長一
丈餘とあるに由あり又此近きあゝるに御門と
云ノ地もある形ヤ彼此由なるを聞ゆと云へるさ
ど大碓ノ命と雙生ハ坐ましきむあらず其を御墓ハ

名ハ負むこヤもいあゞとで思ふ云々

明治元年九月龜山藩知事ノ註進狀ニ同縣學校教
授八羽石男ノ考ヲ載ス其說ニ云〻古事記中卷景行
天皇御段爾云々故還下坐之到玉倉部之清水云々然
今吾足不得歩成當藝斯ノ形云々故號其地謂當藝
也自其地差少幸行因甚疲衝御杖稍歩故號其地
謂杖衝阪也到坐尾津前云々自其地幸到三重村
之時云々故號其地謂三重自其幸行而到能煩野
之時云々竟即崩云々當藝ハ美濃ノ郡名ナレバ
杖衝阪ハ其地ニアルベキヲ今三重郡ノ采女村

ニアルハ三重ノ蹈ヲ風トアヤマレル也三重ハ
此一郡ノ内ニアルベキナレド其地今無シ抑武
尊ノ御道ハ尾津ヨリ正面ヲサシタマヒシ事疑
無ケレバ東方ノ采女村邊ヲ過タマフ事無シ仍
テ古事記ハ混文アル也然ルヲ記傳ニハ此ヲ助
テ言ルレドサテハ美濃ニテ大ク腫タマヘル御
足ニテ采女村マデ御杖ヲ用ヒタマハヌ事ト成
テイトヽ如何也此ニ因テ笠殿ト云地ヲ設ケソ
コナルホ山ヲ陵也ト云モ共ニイカヾナレバ取ル
ニ足ラス日本紀第七巻同天皇之御段爾云乃飲其水而

醒之故號其泉曰居醒泉也云々到尾津云々逮于能
褒野而云々既而崩于能褒野時年三十云々因欲
録功名即定武部記モ紀モ共ニ能褒野トノミニ
テ探ルベキ方ヲ知ラズ寛平二年熱田大神縁記ニ
云々居山下泉側乃飲其水而覺醒故號其水曰居
醒泉也云々便移伊勢到尾津濱云々逮于能褒野
異常委惙云々既而過鈴鹿山病痛危迫云々渡鈴
鹿河中瀬忽隨逝水時年三十仍號其瀬曰能知瀬
能知者命終之詞也今改為長瀬訛也云々此文ニヨリテ其ノ
地ヲ探ルニ先ツ長瀬ハ鈴鹿郡ノ郷名ナレバソ

レヲ求テ長澤村ニ長瀬山深廣寺ト云フヲ得タリ其寺ニ恵心僧都ノ古像アルニ其署名ヲ日光ニ照シテヨク見レバ長瀬山白鳥院法藏寺トアリサテ此長澤村則長瀬郷ニテ長瀬郷トモ長瀬庄トモ傳ヘシ由其村ノ享和三年ノ書上ゲニアリ又長瀬神社モソフニ坐セバ長瀬郷ナル事明ナリ又今徒(ウツ)贄川トテ此村ノ南ヲ流ルヽハ鈴鹿郡ノ内ノ川ナレバ則鈴鹿川也(今ノ鈴鹿川鈴鹿山ハ後世ノ新地ナレバコヽニ用無シ)其村ノ西ナル彼白鳥院ノ二丁十三間許ニ二子(フタゴ)塚ト云アル必其御陵ナリ(添テ奉ル繪圖面ノ如シ

然レバ此二子塚ノ北ナル武備(タケビ)塚トイフハ日本書紀ナル武部ノ農民ノ祖塚ナルベシ武尊ノ男健(タケ)ビマシテ崩タマヘル故ニカク號セシト其社家ノ舊記ニイヘド崩ノ時ニハ男健ビシタマフ御形勢ハサラニ無シサテ又珍ラシキ事ハ此御塚ノ東北ノ地ニツヾキテ人家三烟ノ屋鋪アルハ必守戸三烟ノアトナルコト明ナレバ此二子塚ノ外ニ索ル所無シ

長澤村深廣寺所藏ノ古緣記ニ(此緣記ノ文躰凡二百年許モ以前ノ物ト見ユ今存ル本ハ後ニ寫セルモノト見エタレト近年ノ物ニハアラズ記中御陵御在所ニ

關係スルヲ以テ巡視ノ時影寫シ置タリ夫當寺は往古は天台宗
なて傳教大師ゝ草創なを延曆年中傳教大師伊
勢國教化の節日本武尊の舊跡を尋て當所ゝ陵
へ參籠あをて云々其後大同年中に傳教大師の
法弟大和の國ゝ寶藏坊と申僧日本武尊へ參詣ゝ
て大師草創の庵室ゝ住ゝ杜僧ゝなる依之大師
奏もむなをて長瀬山寶藏寺と勅號をあをを一
寺となを其後長保二年の春惠心僧都伊勢ゝ國
の天照神へ參詣ゝぬふ次ゝ大師の舊跡を尋て
長瀬ゝ神社へ參詣なをて寶藏寺ゝ暫逗留ゝ志ゝ

まふ折節住在空中ゝ弥陀の尊像を刻ゝ又同
躰の尊像を圖画志ぬひて寶藏寺ゝ本尊と志ぬ
ふ其画像は當寺の今の本尊是ゝ於り其本像は長
瀬の杜内ゝ奉納と傳へけん(ヤウマ)釋門の名僧達護法
祈願ゝ九ゝ此神社へ參籠ゝ武門の名將達八幡
太郎田村將軍等武勇冥加ゝ多め參籠の節ゝ寶
藏寺に逗留ゝけ多ゝなむ其後永曆年中に寶藏
寺諸堂殘らず燒失ゝて堂塔ゝ以多いゝ其寺地
田地ゝなる其舊跡今は田地ゝ字に殘るむかり
ふを堂の跡をば志でんと云ひ其外か祢ゝき田

たほの内なゞ、其寺跡を今も申傳るなり其後
ゟ右ハ寺院より二町南にかりに草堂を建立し
て寶藏寺を移ルる志の後む中絶ハ後ゟ候へば
本尊惠心僧都の圖畫ハなるとぞなるヨへり世人
阿弥陀堂と呼習ふとあり其後文治四年甲辰ハ
秋八月十五日に本尊ハ靈告なりて草堂ゟ壹
町西へ佛勅ゟ任て今ハ寺地へ引移せ昔ハ寺號
ハ老人ハ傳語むかりまして寺號ハ呼者はなく阿
弥陀堂ゟ號けるとなり下略
壬申九月鈴鹿郡伊船村ヨり三重縣へ出シタル

書付ニ云、日本武尊御墓ノ儀奉建言候樣御布告
ニ付奉申上候御墓ノ儀者伊勢國鈴鹿郡伊船村
地内ニ御坐候尤去ル辰年朝廷御進臨ノ節神祇官
ヘ奉伺候處元神戸縣管下同郡高宮村ヨリモ同
樣伺立同村地内ニ御遥拜所共同村地續上田村
地内大經塚ヘ新道切開候處同村人氣立勿論右
塚往古ヨり大經塚ト唱平日柴苅等勝手ニ苅取
且土足ニ而上り剣種々移シ候程ノ儀ニ而同村
ニ於テ聊御陵之由緣無之趣高宮村ヘ及ニ欠合候
處片付不申由ニ而元亀山縣ヨり元神戸藩ヘ御

欠合ニ相成候処於同舊縣モ御陵之由縁舊記類無之且上田村地ト境界相立候ニ付彼塚ヘハ新道モ神戸ヨリ取毀ニ相成申候依而万端御通輦先ヘ伺出候處高宮村御遥拜所御取消ニ相成候然ル處去ル庚午年七月元度會縣學頭八羽石男殿神祇官御用ニ而式内神社御取調ノ節當村地二子塚夫々御取調粗御決定ニ相成候ニ付舊縣ヨリモ實地御檢査ノ上社地御修營神祇省ヘ御伺ニ相成候処今般教部省ヨリ實地御巡視之御布告ニ付至急御檢査之上御墓御確定ニ相成候

樣奉建言候以上

三重郡東坂部村館友右衛門ノ建白ニ云ク此ハ壬申九月

巡視ノ時ニ當ラ縣廳ヘ差出シタル建白書也其ノ説ノ大意ハ八羽石男ノ説ニ同ジケレドモ聊カ殊ナル所モアレバ今其文ヲ節畧シテ此処ニハ出セルナリ謹テ案ニ倭武尊御陵ハ鈴鹿郡長瀬郷能褒野之内長澤村長瀬山深廣寺之西二十十三間許ニ土俗二子塚ト稱シ古ク石構ノ口顯レタル必其御陵也古事記ニ云々日本紀ニ云々熟田大神寛平縁記ニ云々依テ右等之文ニ考探スルニ其地ヲ抑武尊ノ御道筋ハ尾津ヨリ溝野村志知村坂部村能褒野ト過玉フベシ次ニ鈴鹿山

ハ鈴鹿郡ノ山ヲサシテ廣ク云ナルベシ鈴鹿川モ同郡ノ川ナレバ今此二子塚ノ南百間許ニ流ル、御贄川ナルベシ鈴鹿ノ號ハ尊ヨリ後世ノ名ナレバ別ニ云ベシ是ヲ以案スルニ長瀬ハ中瀬ノ訛ナラム又長澤村ニ延喜式内長瀬神社坐マセバ此長澤村ハ長瀬ノ本郷ナル事必セリ則此村長瀬郷長瀬庄トモ古ク傳ヘシ由其村ノ享和三年ノ書上ゲアリ又同村長瀬山深廣寺ニ惠心僧都ノ筆古像アルニ其署名ヲヨク見レバ長瀬山白鳥院トアリ又寶藏寺ト稱スサレバ二丁

十三間許リ西ニ二子塚アレバ此二子ノ稱ハ同胞雙生故號ニ二子ヲ曰ニ大碓小碓ト也是小碓命亦名倭武尊トアレバ此二子塚ト古ク云傳ヘケルコソヨケレ亦此塚ノ東南ニ屋敷跡三ツ在是必守戸三烟ノ跡也依之案スルニ今其屋敷圓滿寺持真福寺持深廣寺持ノ地是則守戸三烟三菩提所ナルベシ然其裔胄亡セシニヨリ右三箇寺ノ持地トハナレルナルベシ深廣寺元長瀬山白鳥院寶藏寺トテ天台宗ナリシヲ惜哉寛正二年真宗高田派中興真慧ニ歸依シテ寺號ヲ深廣寺ト改シ由ナ

り伊勢國風土記云寶藏寺寄田三十二丸六字田
文武天皇大寶二年四月道照和尚開基也是則此
寺ナルベシ云々下略
臣等謹按ニ此長澤村ノ二子塚ハ古事記傳ニ
モ上代ノ貴人ノ墓トハ見エタリト説ルノミ
ニテ此ヲ能褒野陵ナラムト云コトハ古クハ
其國人ノ説ニモ聞エヌナルヲハ羽石男熟
田縁記ヲ徴トシテ始テ上件ノ説ヲバ立タル
也臣等此地ニ至テ親シク其地勢ヲ視ルニカ
ノ高宮村ヨリ南ノ方花々タル原野二里許ヲ

隔テ、長澤ノ村居徒贄川ノ流トノ間ノ空閑
ノ地ニ此古墳現存セリ臣等謹テ檢査スルニ
墳ノ高サ凡二間許周廻凡三十間許東面ノ半
腹壞レタル所ニ石構顯レテ上ハ大石ヲ以テ
覆ヒ横モ石ヲ重ネテ構ヘタル其邊コヽカシ
コニ大石ドモノ地ニ埋レテ散ボヒタルナド
スベテ古事記傳ニ説ヘル趣ニ少シモ違フ事無
シ墳ノ周廻ニ竹垣百間余ヲ結廻ラシ南面鳥居
形ノ門アリテ扉ヲ閉ヂ鑰ヲサシ固メタリ此
竹垣鳥居等ハ去ル明治元年ニ亀山藩知事ノ

新ニ作リ構ヘタル也サテカク石構ノ顕レタル
ハ何レノ世ニカ殊サラニ毀チ發キタルモノ
ト見ユ自然ニ壊レタルモノトハ思ハレズ今
ヨリ三十年前伊船村ノ谷口惣左衛門ト云者
心サガナキ男ニテ他國ノ石工ヲ雇ヒ此大石
ドモノ中ニ蓋石ト唱ヘ来レル石ヲ割ラムト
シテ祟ヲ受ケ甚ジキ災ニアヒケル事今度巡
視ニツキテ長澤村ノ戸長ヨリ書付ヲ以申シ出
タリサテ試ニ東西二町南北二丁ノ兆域ヲ測リ
試ムルニ西ハ御贄川ノ岸ノ松林中ニ留リ東

ノ方モ松林中ニ留ル南北ハ野原ニテ障ル所
無シサテ熱田縁記ニ渡ル鈴鹿川中瀬ヲ忽隨ニ逝水ニ
云々仍號テ其瀬ヲ曰ニ能知瀬ト能知者命ノ終ル之詞也今改為スル長瀬ト
訛也トアル此ゾ石男ノ説ノ由テオコルトコ
ロナレバ先ヅ長瀬ノ地名ヲ考フルニ和名
抄ニハ長世ト書テ奈加世ト訓註アリサテ此
長澤村ノ邊古ノ長瀬郷ナルコトハ式内長瀬
神社即チ此村中ニ坐マスヲ以テ疑無シト云ヘ
リカクテ石男ノ説ニ見エタル深廣寺ノ古画
佛ヲ見ルニ實ニ數百年前ノ物ト見エテ紙中

甚古ク煤ケ黝ミテ畫モ書モ共ニ分明ナラザ
シテ佛像ノ側ニ長瀬山白鳥院法藏寺ト云九
字ホノ〳〵見エタリ石男ノ説ニ此ノ佛画恵心僧都ノ古像ト云ヘルハフト思ヒ誤レルモノ也上ニ出セル深廣寺古縁記ニヨルニ此ハ長保二年ノ春恵心ガ書タル弥陀ノ像ナル事明カナルヲヤ又此外ニ傳教ガ像ヲ書タル画幅
アリ當寺開基傳教大師平城天皇勅願所日本
武尊長瀬兩社別當長瀬山白鳥院法藏寺賜勅
號寛(虫喰)五巳年秋八月三日改舊名深廣寺ト書
付タリ此画幅ハ絹地ニテ此モ大ニ古色アリ
虫喰ノ所ハ正ノ字ニテ年號寛正ナリト寺僧

ノ説也サテ右ノ文ニ日本武尊長瀬兩社別當
トアル事不審キニツキテ長瀬神社ヲ搜索ス
ルニ棟札數枚ヲ出セリ其中ニ表ニ奉御建立
白鳥大神宮御寶殿于時慶長六歳辛丑十一月
吉日神主金森治郎左衛門藤原吉信大工山本
土佐ト記シ裏ニ長瀬神社當所五社大明神勢
北鈴鹿郡長澤村惣氏子敬白ト書タルノミニ
テカノ兩社別當云々ノ旨趣ハナホ詳ナラズ
又石男ノ説ニ今御贄川トテ此村ノ西ヲ流ル
ルハ鈴鹿郡ノ内ノ川ナレバ則鈴鹿川也今ノ

鈴鹿川鈴鹿山ハ後世ノ新地ナレバコヽニ用
無シトアルハ一概ノ論ニテ諾ナフ人アルベシ
トモ思ハレズ又同人ノ説ニ此御塚ノ東北ノ
地ニツヾキテ人家三烟ノ屋鋪アルハ必守戸
三烟ノアトナルコト明カ也トアルモ何ヲ據
トシテ説ルニカ心得ガタキ説ナラズヤ又上
ニ引タル長澤村深廣寺ノ縁記ニ延暦年中傳
教大師伊勢國教化の節日本武尊此舊蹟を尋
て當所の陵へ參籠ありて云々ト見エタル此
陵ハ必此長澤村アタリナラデハ叶ハザルガ

如シ依テ思フニ此ハカノ謂ユル武日塚ヲ已
クヨリ御陵トスル説ノアリシニ依テ延暦年
中傳教大師云々ナド例ノ僧徒等ガ作リ設ケ
タル説トコソ聞エタレ決テ二子塚ノ丁トハ
思ハレズ然レドカノ寛平縁記ニ今改為長瀬
云々ノ文ハ今ノ長瀬ノ郷ニヨク叶ヒテ聞ユレ
バ石男ノ説容易ニ棄ガタキニ似タレモ千有
餘年ノ久シキヲ經ル間地名ノ轉變モ量ガタ
ケレバ試ニ云ハバ高宮ノ郷名ハ景行天皇ノ
行宮アリテヨリヤヽ後ニ唱ヘ始タル
地名ナルヿ著ケレバ尚上古ニハ此高宮アタ
リモ即チ長瀬郷ナリケムモ知ルベカラズ和

名抄ニモ高宮多世長世畷カト續ケテ出セリ
當今高宮ト長瀬トノ距離凡二里許モアルベ
キ筈現今ノ形勢ニノミ泥ミテ猥リニ上古ヲ疑
フベキニアラズ況テ同郡高宮郷高宮村ニ儼
然タル御陵現在シタマフ上件ニ説ルガ如
クナレバ此二子塚ノ説ハ今更論ズルニ足ラ
ザルモノナルベシ

武備塚

古事記傳廿九能褒野陵の下ニカノ高宮村ナル丸山ノ事
ヲ論ヲヒタル文ノ續ニ延佳云今鈴鹿郡長世郷
曠野ノ中ニ有ル陵墓俗云ニ多氣備墓是能褒野ノ墓ニ而多氣

比建部之訛乎と云ふも上代の陵墓はさまをよ
くも考へぞあり後世は心以て大方は思ひ云
ふもはなり此武備塚と云冢も石藥師驛より西二
里餘西方長澤村の地村は北なる野中の林中ヨ
リ出て高さ六七尺許の小冢なり小木竹なと生
茂れるを前は社あり又同林中其塚の後方ヨ車塚
又一町許東南北方ヨ宝冠塚宝蓋塚ルと云そは
皆並いやくしき冢ルを大なる近きころも此武
備塚を能煩野御陵と定めて世人も然心得たる
め故ぞ此冢もはらに上代の御陵のさはヨ非ぞ

若し彼御陵形らむまゝ假令遥の代々を經て崩き欽て今の如くかくなれらむまは必内形る石構へ露きあるべきまゝ然る物もき屋て見えざるをや吾徒白子人坂倉茂樹ぞ考へまも此武備塚も倭建命の御伴まゝ從ひし吉備武彦或ハ大伴武日ノ連などの墓ならむこのゝ云まもけもあるべし御伴さら波し故を以て此人々なゝをも處て後まゝ此ノ同じ能煩野の内り葬りしまもはる屋けきむ形り又倭建命の御末まゝ建部氏はまて後まゝ此國の安濃郡なゝまもまも其氏人ありしこのば其人形ゝを遠

祖ゝ御陵遥を慕ひて同此野まゝ葬し墓ゝゝまもあらむこの其ゝ何まゝ波此武備塚御陵まは非る屋し云々

背書國誌ニ云享保十四年ニ今宿村西田榮欣ト云者長澤村ナル武備塚ヲ白鳥陵ニ定ム或曰無念ノ事也ト荒野横山維中三樂トイヘル人古人ノ辭ニ依テ難之三樂云享保十四年ノ以前ハ武日塚ハ渺々タル廣野ノ中ニ屹立セリ時ノ領主板倉侯二町四方ノ地ヲ寄ヲレ墓前ニ社ヲ建寶冠寶床ノ二塚ヲ築キ列ネ松ヲ植エ境内林木繁

茂シテ今ノ形容トナル云々

雙樹落葉ト云書ニ伊勢名島改方普述谷川士清閲トアリ長瀬神社

云々神名帳考證ニ云在長瀬郷長澤村或人云英太郎長澤村武備神社是也所祭稚武彦命又云吉備武彦命此墓其邊ヨ寶裝塚殯跡ヤれぼーき有享保十四年河曲郡今宿村此僧縁起を書て吉田家へ許しより武備神社ハ倭武命の陵ヤなるしと云ヲ武備社記ニ云能褒野武備神社ニ坐ス日本武尊一坐と見え多ヲ云々或人云英太郎長澤村と以へるヤ長瀬郷と地の接ヤるをもて此事ヨヤ云々

景行紀ニ云葬ル於伊勢ノ國能褒野ノ陵ニ云々徒ニ葬ル衣冠ヲ因テ欲ル録功名ヲ即定ム武部ヲ古事記作ル建部ヲ又云初メ日本武尊娶テ兩道入姫皇女ヲ為ル妃生ル稲依別ノ王ヲ次ニ足仲彦天皇次ニ布忍入姫命稚武王其兄稲依別ノ王ハ是犬上君武部ノ君凡ソテ二族之始祖也新撰姓氏録ニ云建部ノ公犬上朝臣同祖日本建尊之後也と見えしヤを後ム武備ノ武部の訛なるべしそヤ崩御此地なれむ其所ヨ塚を築きて御ヤるしヤなし稲依別ノ王を建部ヤ形し給ひて功名を後世ヨ傳へ給ふ其稲依別ノ王を後てゝり祀り奉て建部ノ神社と稱へ奉るを武備

と記しるならむの云々

臣等此所ヲ巡視スルニ右ノ長澤村ノ彼二子塚ノ東ノ方五町許隔タル所ニアリ塚ノ形容古事記傳ニ見エタル如ク高サ一丈ニモ足ラザル小冢ナレド享保年間ニ領主ノ植タル松杉其餘ノ雜木ドモ生茂リ殊ニ二町四方ノ封疆正シク備ハリ大キナル鳥居ナドアリテ神サビタル所也此塚ヲ武備ト唱フルハ吉備武彦或ハ大伴武日連ナドノ墓ナラムト云説モ然ルベク聞エタレド此ハカノ日本紀ニ欲録

功名ヲ即チ定ニ武部トアル其氏人ノ墓ナルベシト云説穩ナルガ如シ抑此武備塚ヲ能褒野陵ニ當タルハ貞享四年ニ著セル度會延佳ノ古事記頭註ヲ始トスルヨシ云ヘル説モアレド上ニ引タル長澤村深廣寺ノ古緣記起ニ御陵ノ事アルハ決テ此武日塚ノ事ナルベク考ヘラレタリ此事上ノ二子塚ノ下ニ説ヘルガ如シ然レバ貞享ヨリモヤヤ古ク其説ノアリシ事著シカクテ彼背書國誌ノ説ニヨルニ享保十四年ニ西田榮欣ト云者其説ヲ主張シテ領主ニ許テ塚ノ前ニ小祠

ヲ設ケ諸陵式ノ兆域ニ本ツキテ二町四方ノ
封疆ヲ定メシヨリ土人ナベテ此ヲ能褒野陵
ト思ヒ定メタル趣ナリ然レド其説ノ用ヰガ
タキイハ已ニ古事記傳ニ論ヘルガ如クナレ
バ今煩ハシク茲贅セズ又此武備塚ニツキテ
國人萱生由章ト云人鈴鹿賦ト云ヲ作リ述タ
ル説アレド其文イト長キガウヘニ例ノ推量
ノ説モ多ク見エタレバ今ハ省テ引出ズ

右伊勢國鈴鹿郡能褒野御墓實檢愚勘註進
如件時習等再拜頓首謹言

少録中島秉彝
權中録子安信成
權大録猿渡容盛
大録山之内時習

明治六年十二月

諸陵課印

寫濟

上申

日本武尊能褒野御墓 先年当課官員巡視
ニ節鈴鹿郡高宮村（外三ヶ村ニ分ル）字ハ白鳥塚ヲ御実蹟ト見
認ル旨上申ニ及ヒ候ヘ共 御同意ニ上御決定ニ相
成已ニ墓掌丁ヲ被定当今三重郡ヲ御修造仕
様目論見御伺ヒ相 御修造仕
様仕度 御伺ヒ 稟議大録大澤法医ヲ引紙甲印
ニ通異論申立候ヲ尚 課中衆評ニ上別紙乙印ニ通
更ニ考案ヲ立付議ヲ以再応答無之候ヲ到底
法医主張スル処ハ先哲ニ見込且他ニ可求確説無之
ト一課決議ヲ以テ不容易ヲ体ニ付 宸襟ニ関
係次書類引纏メ御一覧ヲ仰少条可能
様御指揮ヲ願ヒ度也

足立　土特　八木

宮内省

明治九年八月

諸陵課 猿渡 千安 大久保 濱田

此足立ヶ瀬ニも御尋ね当

[illegible]

[illegible]

[illegible]

(七大)

諸陵課印

十月五日 寫濟 永久保存

九年九月十二日 回

輔 宍戸 一翁

丞 [illegible] 足立 八木

猿渡宮盛 猿渡 諸陵課 千安 大久保

日本武尊能褒野御墓之儀ニ付議案

日本武尊能褒野御墓之儀ニ付伊勢國鈴鹿郡石薬師村高宮村外二ヶ村之會地字高飛野ニ白鳥塚（一名九山）ト申古墳先輩ノ考案土人ノ傳説同一ニ帰シ確タル御實蹟ト見込實地検査ノ勘註繪図面等及上申候処正院ヘ伺ヒ上御決定ニ相成已ニ掌丁ヲモ被定当今三重郡ヲ御修繕仕様伺出取調中ニ処權大録大津信臣別紙之通淺海倫子立後ヲ付テハ三重郡ハ左ニ

明治九年八月

諸陵課

触穢野墓院ニ出決シニ
而成ても大阪ノ議を有ラ
一応三重郡ニ
伺設ル寫ト為而酒ヲ中入
但演墓未
来ても永久ニ
見合セ
て

諸陵課印

永久保存

寫濟

九年

輔

一翁

丞

日本武尊能褒野御墓之儀ニ付議案

日本武尊能褒野御墓之儀伊勢國鈴鹿郡石薬師
村高宮村外二ヶ村之會地字高塚野ニ白鳥塚
一名九山ト申一古墳出ル聞ノ者薬土人ノ傳説同一ニ帰シ
タル御實蹟ト見込實地検査ノ勘註絵図考及上申仕
処正院ヘ伺之上御決定ニ相成已ニ事了ヲ被定当
今三重郡ヲ御修復仕様伺出取調中ニ処権大録
大河内信任別紙之通議論申立ニ付テハ三重郡ヘ左ニ

諸陵課印

十二月七日 寫済

九月十三日 施行 湘

九月十三日 注進深草宮 酥

通一應御掛合ニ相成候ハヽ可然哉

依頼事

其方儀管下伊勢國鈴鹿郡石薬師村高宮村外二ヶ村立會字高塚熊野ニ白高塚（一名九山ト称シ俗古墳ヲ称シ）古墳ヲ高宮陵ト決定ス丁ヶ相定南方ハ俗称取須中ニ処ル郡郷久志村字丁子塚（一名王家ト称シ俗古墳ヲ右ハ墓ト見ル）其實墳ヲ古建設ヲ有ス就テハ地方ニ於ケモ右ニ伝説有ル故又其後證ニ備フベキ書類ヲモ有ル哉細ヶ面倒ヲ為ス様知有ル哉尤ニ付御取調ヲ為ス様

三重縣令 元

權大丞

九年十二月五日 回

輔

宮内卿 一翁 鍵 足立 土肥 八木

十二月六日 注進掛書類宮 吉田 同日 施行 湘

三重縣令ヘ

地方伝説形勢ヲ以テ及ル考ヲ以何ト

ヲ以テ伝説ヲ

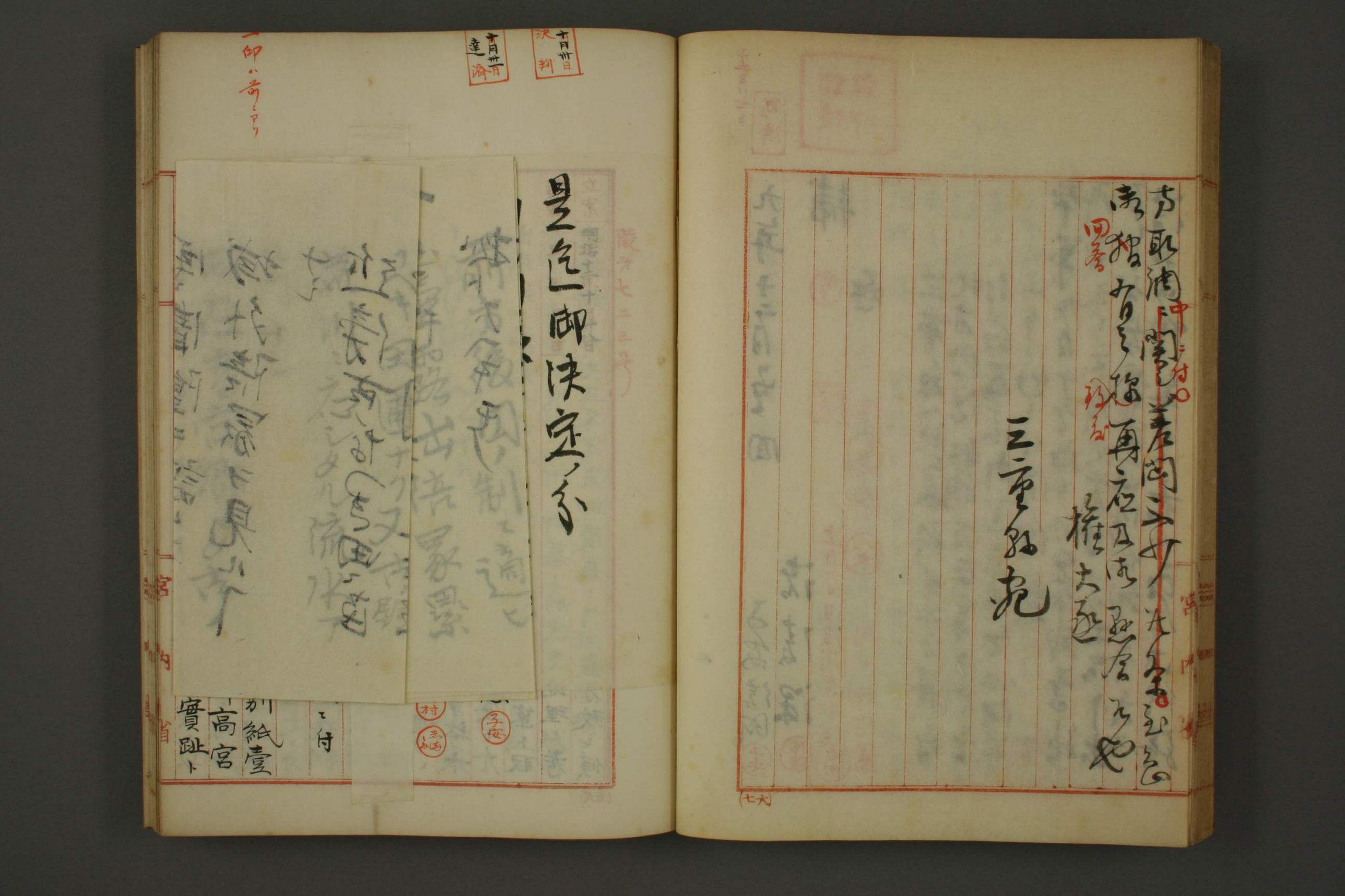
本年九月十三日付ヲ以テ高宮陵

郡墓云ヲ云ヲ義ニ付

有ヲ云ヲ古墳ヲ出

伝説ヲ指ス

宮内省 高宮信敬 千安 樣渡 諸陵課 深草 宮内省



戸取調中間之事
再応取調之事
右之通
三条殿

(七大)

十月廿日決判

十月廿日達済

一印ハ奇ヲ

是迄御決定ノ分

別紙壹

高宮

實跡ト

十月廿日 決判

十月廿日 達濟

一印ハ奇ニアリ

陵ヲ七二三号

立案 明治十三年十月十八日

決裁 大正 年 月 日

御 書記官 御陵墓懸 (子安)

輔 (土方) 掛書記官 (正聲) 屬 (大澤) (大村) (志馬)

庵印勘註二印後案其外三四五六印迄入ルベキカ

日本武尊能褒野墓再検改定ノ儀ニ付

同

該御墓ハ明治九年一月旧教部省ニ於テ別紙壹印勘註ニ據リ三重縣下伊勢國鈴鹿郡高宮村外三ヶ村入會地ニ有之字九山ヲ以テ御實趾ト

是迄御決定ノ分

白鳥塚

非トスベキモノ

田境ノ築造ニメ之則方

後因ノ陵制ニ倣ヒス

陵山ニ土壇ヲ埋メス周

囲ニ溝隍ヲ設ケス

域外陪冢ヲ見ルヿ

ナシ

近傍ニなつき田ニ在

スベキ田圃ナク又古駅

荒川ニ沿シタル流水ア

ルヿナシ

所在高宮郷ニ古ノ

長頼郷ノ地ニ似ヲス

今般御改定之通ノ分

丁子塚又王塚

拠トスベキモノ

前方後因ノ制ニ倣ヒ

ナシ

近傍古ノ名つき田ニ当ヘキ田園ナク又古駅荒川ニ沿シタル流水アルヿナシ

所在当宮郷ニ古ノ長瀬郷ノ地ニ如ス

今般取改定之迄分

丁子塚ヨリ王塚

拠トスヘキモノ

前方後円ノ制ニ適ヒ土壇露出陪冢累々前面女カ坂ト字セル地アリ南傍田地多ク即勢ノ川ト称スル水近ク流レテ古ノ鉈荒川ニ右ニ而又迂ヘ遷ヘテ昔ノ長瀬ムラナリ

相決シ候處其後大澤清臣（現今本省五等屬）丸山古墳ヲ以テ該御墓トスルハ非ナル由ヲ論シ同郡田村ノ内名越村字丁字塚（一云王塚ノ）古墳相當タルヘキ考案別紙貳印差出候尤同地ハ公然檢覈致候ニモ無之ニ付同省ヨリ更ニ三重縣ヘ照會相成候處廢省後別紙三印之通内務省ヘ申出且旧説有之候長澤村ノ儀モ別紙四印之通申出候ニ付同省ニ於テ御用掛小中村清矩ヘ考案為致別紙五印之通リ有之候ヘ共未タ著手ノ場合ニ至ラスソ該事務本省ヘ引渡シ相成候處今度清臣等實地檢査トノ出張致シ別紙六印再考案差出候ニ付尚篤ト取調候ニ清臣カ陳スル所ノ御墓ノ形狀及地理ノ考証精細ニ有之且又年來御陵墓ノ丁ニ盡力致シ候

谷森善臣ノ説ニモ字丸山ハ古墳タリト雖モ圓墳ニシテ日本武尊時代ノ制ニ非ラスト申候由旁此名越村字丁字塚ハ當時ノ墓制ニ符合シ疑ナキ御實跡ト相考候条曩ニ御決定ノ丸山ノ方御取消更ニ丁字塚ヲ以テ御取極相成可然哉仍テ左案相伺候也

御達案

番外

三重縣

其縣下伊勢國鈴鹿郡高宮村外三ヶ村入會地ニ有之日本武尊能褒野墓ニ儀ハ今般詮議之次第有之取消更ニ同郡田村ノ内名越村字丁字塚（一云王塚）ヲ以該墓ニ改定候条兆域見込相立實測繪圖面相副可伺出此旨相達候事

第二卯

伊勢國鈴鹿郡田村之内名越村

日本武尊能褒野墓勘註

景行天皇皇子

日本武尊能褒野墓

在伊勢國鈴鹿郡田村之内名越村

○日本書紀（景行天皇御巻）曰四十年夏六月東夷多叛邊境騷動　冬十月壬子朔癸丑（二日）日本武尊發路云々於是蝦夷等悉慄褰裳披浪自扶王舟而着岸仍面縛服罪云々蝦夷既平云々日本武尊於是始有痛身然稍起之還於尾張爰不入宮簀媛之家便移伊勢而到尾津云々逮于能褒野而痛甚之則以所佩蝦夷等獻於神宮曰遣吉備武

彦奏之於天皇曰臣受命天朝遠征東夷則被神
恩賴皇威而叛者伏罪荒神自調是以卷甲戢戈
愷悌還之冀曷日曷時復命天朝然天命忽至隙
駟難停是以獨卧曠野無語之豈惜身乙唯愁不
面既而崩于能褒野時年三十天皇聞之寢不安
席食不甘味晝夜喉咽泣悲摽擗因以大歎之曰我
子少雄王昔熊襲叛之日未及髫角久煩征伐既
而恒在左右補朕不及然東夷騷動勿使討者忍
愛以入賊境一日之無不顧是以朝夕進退佇待
還日何禍兮何罪兮不意之間倏亡我子自今以

後與誰人之經倫鴻業耶即詔群卿命百寮仍葬
伊勢國能褒野陵時日本武尊化白鳥從陵出指
倭國而飛之群臣等因以開其棺槨而視之明衣
空留而屍骨無之於是遣使者追尋白鳥則停於
倭琴彈原仍於其處造陵焉白鳥更飛至河内留
舊市邑亦其處作陵故時人號是三陵曰白鳥陵
然高翔上天徒葬衣冠因欲録功名即定武部也
是歲天皇踐祚四十三年焉
○古事記中曰自其幸行而到能煩野之時思國
以歌曰云々此時御病甚急再御歌曰袁登賣能

登許能辨再和賀淤岐斯都流岐能多知曽能多
知波夜歌竟即崩再貢上驛使於是坐倭后等及
御子等請下到而作御陵即匍匐廻其地之那豆
岐田而哭為歌曰那豆岐能多能伊那賀良通伊
那賀浪通波比母登富呂布登許呂豆良於是化
八尋白智鳥翔天向濱飛行
○續日本紀大寶二年八月癸卯八日震倭建命墓
遣使祭之
○寛平熱田縁起曰日本武尊云々逮于能褒野
異常委悞云々既而過鈴鹿山病痛危迫云々渡

鈴鹿河中瀬忽隨逝水時年三十仍號其瀬曰能
知瀬能知者命終之詞也今改為長瀬訛也云々即勅羣卿
百寮仍葬伊勢國能褒野
○延喜諸陵式曰能褒野墓日本武尊在伊勢國
鈴鹿郡兆域東西二町南北二町守戸三烟
謹ヲ按スルニ件ノ能褒野墓ハ伊勢國鈴鹿郡
田村領ノ内名越村ノ管内字女カ坂ト云ヘル
地ノ傍ニアリ而シテ墓ノ字ハ王墓トモ丁子
塚トモ云ヒテ其高四間半許周圍百六拾間許ナ

り前方後圓ニ土壇ヲ三段ニ列置シテ東面ニ
築立タリ敷地平坦ナラス古ハ高ク左ハ低シ
故ニ西東北ノ三方ハ隍ノ蹟マタ堤ナト宛然
トシテ尚存シテ小松生ヒ南方ハ隍ノ蹟モ工
スモトヨリ無カリシモノト見エタリ塚ノ全
面ニハ小松雜木叢生シ後圓ノ頂上ニ窪メル
所アリ徑三間許深二間半許ナリ此ハ御在所
ノ石椁崩レテカヽル狀ヒナレルモノナリ土
人口碑ニ日本武尊ヲ葬奉リシ塚ソト云ヘル
ハ其傳說正シト云フヘシ其ハ塚ノ前ナル小

徑ノ字ヲ女カ坂ト呼ヘルハ則古事記ニ於是
坐倭后等及御子等諸下到而云々ト見エタル
故事ニ思合セラレ又其塚ノ敷地ノ南方一円
田地ナルモ古事記ニ作御陵即匍匐廻其地之
那豆岐田而哭為歌曰那豆岐能多能伊那賀良
迩伊那賀良迩波比母登富呂布登許呂豆良ト
見エタルニ地勢イトヨク合ヒタリ加之寛平
熱田緣起ニ渡鈴鹿河中瀨忽隨逝水云々仍號
其瀨曰能知瀨能知者命終之詞也今改為長瀨訛也ト見
エタル鈴鹿川ノ中瀨モ其塚ノ南三町許ニ流

ル、御贄川ニ當レリ其ハ水路數條アリテ其
中流ナルカラノ稱ナルヘシハタ其郷名ノ長
瀬ノ稱モ近傍數所ニ存セルナト何レモ古書
ノ趣ニ符合セリカヽレハ其塚ノ前方後圓ニ
作レル將ソノ傍ニ十餘ノ陪冢ノ散在セルナ
トスヘテ當時ノ狀ニカナヘル冢ハ古ノ能褒
野ト思ハルヽ地ニ其塚ヲオキテハアルコト
無ケレハ此皇子ノ御墓ナランヿハ疑ヲ容ル
ヘキニアラス然ルヲ古事記傳九九卷ニ陵ハ今
ハさゝのふらゑと高宮村モ云ヨ丸山といふ

あり茶臼山とも經塚とも白鳥塚とも云ひて
甚大ク高ク圓ク周ヨ堀の形なともかゝ
く殘りて全上代の御陵ともみ狀ありつつハ
此ならんとそおもふゆる谷川氏も今高宮村ヨ
ひよとり冢といふあり能煩野御陵ハ此
ある〻しと云へりト見エ熱田緣起參考ノ說
ニ武尊崩能褒野今此野難定何地土人亦不知
其名或云莊野石藥師ニ驛間有茶臼山疑是陵
ト見エ五十鈴遺響ニ日本武尊御陵莊野驛ヨ
リ十町許東高宮村ノ南ニ椎山ノ山脉ニ續キ
テ一堆ノ山丘アリ形圓ニメ上下二重疊テ茶

仏ニ似タリ方俗茶臼山或ハ丸山或経塚山或ハ鵠塚ト云是白鳥陵ナリ北ハ廣瀬野ニ續キテ馬鬣封ノ威儀遺レリ云々此地ヨリ往年曲玉及埴輪甕壺ノ類ヲ掘出セシ事アリ是能褒野ノ葬陵也ナト見エタルニ據リテ先年巡視官員等高宮村ノ北東ナル椎山ト云フ岡山此山ハ高宮村ノ北東八町許ニアリ山頂ニ御笠殿ト稱シテ日本武尊ノ御笠ヲ納メシト云傳フルト社アリ其北後ノ方二町許ニ古墳ハアルナリ丸山ト云フ古墳ヲ能褒野墓ト断定シテ勘註ヲ上申セシニ由リ終ニ其處ニ決定セリ然レモ其古墳ハ字コ

ソ白鳥塚トモ鵠冢トモ云ヒテカノ白鳥ノ故事ニ由縁アルカ如クニ聞エレ其體狀ニ於テハ當時ノ陵墓ノ狀ニ考合スルニ霄壤ノ異アルノミナラス地理ニ於テモ古書ノ趣ニ符合セサル古墳ナリ古事記傳ニハ堀ノ形ナトカツ〳〵殘レル趣ニ云ヘレト然ル隍ナトアリシ塚ナラサルヿハ一目瞭然タリ但シ先年巡視官員ノ古事記傳ニ周ニ堀形殘レリトアルハ山ノ西ノ方ノナタレタル所ニ近來墾キタルトミエル田地アル此レラノアタリヲ云ヘルニヤ東ノ方モ深キ谷アリテ椎山ト境ヲナセリ此モ堀切ノ跡トモ云ヘキ形勢ナリト云ヘレト清臣カ見ル所ニテハ本文ノ如シハタ五十鈴

遺響ニハ馬鬣封ノ威儀遺レリト云ヘレト元
來圓體ニ作レル冢ニテ前方後圓ノ山作ニア
ラサレハ然ル形狀アルヘクモアラス然レハ
縱令曲玉埴輪ナト堀出シ事アリトモ然ル物
品ハ何レノ古墳ニモアルモノナレハソレヲ
以テ能襲野墓ノ證ニハ為シガタシイデカノ
王墓ト白鳥塚トノ當否ヲ詳ニ云ハン王墓ノ
狀ハ前件ニ云ヘル如ク前方後圓ノ山作ナル
ノミナラス當時ノ制タル土壷モ露出シテ狼
藉タリコレ御實蹟トスル證一ナリハタ當時

ノ例タル必近臣ヲ近傍ニ葬レリ其陪冢モ域
外ニ纍々トシテ存セリ其證二ナリハタ其塚
ノ前面ナル小徑ノ字ヲ女カ坂ト云ヘルモ其
南傍ノ地ノ一圓田園ナルモ古事記ニ於是坐
倭后等及御子等諸下到而作御陵即匍匐廻其
地之那豆岐田ト見エタル故事ニ盡ク符合セ
リ其證三ナリハタ其南ニ流ル、御贄川ハ寛
平熱田縁起ニ渡鈴鹿川中瀬忽隨逝水ト見エ
タル鈴鹿川ニ當レリ其證四ナリハタ其名越
村ワタリノ村々ハ昔時ノ長瀬郷ニテコレモ

寛平熱田縁起ニ歸真瀬曰能知瀬（能知者命終之詞也）今
改為長瀬訛也ト見エタル趣ニカナヘリ其
五十リコノ五證以テ御實蹟ヲ驗ルニ足レリ
又白鳥塚ハ高五間計（但シ先年巡視官員ノ勘注ニ高凡十五六間許ト記セルハ誤ナリ）周回百四拾間許（コレモカノ勘注ニ廻リ凡二百間許ト見エタルハ違ヘリ）ニシテ圓體ニツキテ全面ニ黑キ小石ヲ敷
タル古墳ナレトモ當テストスルモノ五アリ
其ハ山作ノ狀圓體ニシテ前方後圓ノ制ニ
アラス加之北方ノ崩レタル處ニモカノ土壷
ノ露出セルコト無ク周ニ隍モ無シコレ當時

ノ狀ニ違ヒタル一ナリハタカヽル墓ニハ域
外ニ數箇ノ陪冢必アルヘキ例ナリ然ルヲサ
ルモノ一モ見ハラスコレモ當時ノ狀ニ違ヘ
ル二ナリハタ古事記ニ作御陵即甸廻其地
之那豆岐田ト見エタルニ據ルニ墓邊ニカナ
ラス若干ノ田圃アルヘキナリ然ルヲ昔時ヨ
リ是ナラント思ハル、處無シコレ三ナリハ
タ寛平熱田縁起ニ據ルニ傍近ノ地ニ必昔時
ノ鈴鹿川アルヘシ然ルヲコレモ是ソト思ハ
ル、處無シコレ四ナリハタ其高宮村及其近

傍ノ村々ハ昔時ノ高宮郷ノ地ニテカノ縁起
ニ弗其瀬曰能知瀬能知音命終之詞也今改為長瀬訛也
ト見エタル長瀬郷ノ地ニアラスコレ五ナリ
コノ五否以テ御實蹟ナラサルヲ証スルニ足
レリ一是一非明確ナルヿカクノ如シコレ白
鳥塚ヲ御實蹟ナラスト云フ所以ナリ又長澤
村ニ二子塚ト字セル古墳アリ能褒野墓ハ是
ナリトテ龜山藩學校教授八羽石男ト云フモ
ノハカケル考説ヲ明治元年九月知藩事ヨリ
神祇官ヘ上申セリ其考ハ古事記ニ云々全文前條

ニ載セタリ故ニ畧セリ寛平熱田縁起ニ云々是モ全文前條ニ載セタリ故ニ畧セリ此文ニヨリテ其地ヲ探ルニ先長瀬ハ
鈴鹿郡ノ郷名ナレハソレヲ求メテ長澤村ニ
長瀬山深廣寺ト云フヲ得タリ其寺ニ惠心僧
都ノ古像アルニ其署ヲ日光ニ照シテヨク見
レハ長瀬山白鳥院法藏寺トアリサテ此長澤
村則長瀬郷ニテ長瀬郷トモ長瀬庄トモ傳ヘ
シ由其村ノ享和三年ノ書上ニアリ又長瀬神
社モソコニ坐セハ長瀬郷ナルヿ明ナリ又今
御贄川トテ此村ノ南ヲ流ルヽハ鈴鹿郡ノ内

ノ川ナレハ則鈴鹿川也今ノ鈴鹿川鈴鹿山ハ後世ノ新地ナレハコ
コニ目無シ其村ノ西ナル彼白鳥院ノ二丁十三間
許ニ二子冢ト云アル必其御陵ナリ云々又珍
ラシキ事ハ此御塚ノ東北ノ地ニツヽキテ人
家三烟ノ屋舗アルハ必守戸三烟ノアトナル
コト明ナレハ此二子塚ノ外ニ索ル所無シト
云ヘリ其二子塚ノ下ハ古事記傳廿九卷ニ長澤
村ノ少西南方の野中ニ高さ一丈あまり周り十
丈許もあら〳〵と見ゆる古塚あり東面の半腹
の土崩きこる所ふ穴なりて石構の口顯きこ

る口ハ狹くして穴の内も奥へ八九尺横七八
尺むりにて上ハ大石を覆ひ横も石を重祢
て構へこり是を里人二子塚とも二子穴とも
云へり其邊こゝかしこに大石ともの地ニ埋
もきこるらいきゝあ顯きこるも幾つもあり
此しも此塚此石構乃散たるふ敷へし又此塚の
西方ニも今一ッ冢あり柳二子塚ハ正しく上代
の貴人乃墓とい見えこりされと此も御陵と
は定かあらしト記セルカ如シハ羽石男カカノ
熱田縁起ニ見エタル鈴鹿川長瀬ナトノ下ニ

着眼セルハ卓見ナルニ似タリ然レトモ件ノ
二子塚ヲ以テ御實蹟ト認メシハ當時ノ陵墓
ノ體相ヲモ更ニ知ラサルノミナラス昔時ノ
長瀬郷ノ称モタヽ長澤村ノミニ止レリト思
ヘルハスヘテ郷ハ一郡ヲ區分セル名称ナル
コトヲ知ラサルヨリ長瀬神社白鳥院等ノ名
称ニ牽合セル妄説ナリ續日本紀和銅四年ノ
條ニ三月辛亥割上野國甘良郡織裳、韓級、矢田
大家縁野郡武美片岡郡山等六郷別置多胡郡
ト見エタルニテ郷ハ則一郡ヲ區分セル称ナ

ルコト一國ヲ區分スルニ郡ヲ以テセルニ等
シキコトヲ知ルニ足レリカヽレハ昔時ノ一
郷ハ今ノ一村ニ村乃至三四箇村ニ止レルニ
非ルコトモイヨ〳〵明瞭ニテ即上ニ云ヘル
名越村モ長瀬郷ノ内ナルカラニ長瀬山ノ名
モ村内小五ノ字ニ正シク存セルニアラスヤ
然ルニ長瀬山白鳥院二子冢（二子塚ハ同シ狀ナル古墳ノ東西ニ箇相對セルヨリシカ字セルナルヘキヲ日本武尊ト大碓命ト雙生ナリシニモ思ヒヨセタルモノナルヘシ）ナトノ称呼ニ拘泥シテ當時ノ陵
墓ノ形狀ヲモ考究セス妄ニ斷定セルハ猶カ

ノ高宮村ナル白鳥冢ノ形狀地理及ヒ陪塚ノ
有無ヲモ問ハス御實蹟ト認メタルト同一ノ
誤ナリ然レハコソ陪冢ナトノ一モ具ハラサ
ルニ子塚ニ據リテ考説ヲ為セルナレ猶當村
ノ管内ニ武備塚ト云フモアリテ此御墓ナラ
ントエヘル古説モアリシカト今ハ其塚ノ御
實蹟ナラサルヿハ皆人ノ辨ヘ知レル所ナレ
ハ更ニ贅言セス柳能褒野トハ古其邊ノ曠野
ノ惣称ニテ古事記傳ハ此野ハ今其地形
を見るに大かゝ鈴鹿郡の北方ハ半よも過て

皆野ふる其内ゟ村里も數多あり田畠なる地
も多くれとも又遥々ゝ廣ゝ曠野なる處々も
多くしてもへくは一連の大野ゟ〳〵上代のさゝなみ
しハのうる當郡の東西乃極ゟてとれる西方ハ
漸ゝふ高くしてさころ〳〵卒ゟ高き所もある
さはゝ所ハ低き方ゟ望見ハ山
の如くゟて登れむ上ハ又平ふる野ふり漸ゟ登る地ふれば名義
登ゝ野ふ教へしかくて西の極ハ高山並連き
て近江国の堺ふり其中ふ野登山と云ありて最高〳〵
是も野ゟり漸ゟ登る故の名なるへゝさて此
野ハ今ハ各所ゟて或ハ廣瀬野と云或ハ鞠ゟ

野とも云ふこれらは総ての名とも聞えぬを
古は能煩野と云ふハ大名よそありきむ（此名も今ハ土人なとは知らさるなり）ト見エタルカ如し然レハ今鞠
カ野廣瀬野武日野ナト呼ヘル方五十町許ノ
地ハ即古事記傳ノ説ノ如クイニシヘ能褒野
但シ土人ニ問試ムルニ彼處ニテモ此處ニテ
モ能褒野ノ旧名ノ遺レルサマニ云ヒナセル
ハ近年然ル古名ヲ聞知リテ云ヒシ地ニテ
サカシラコトセルモノナリト
其廣瀬野ノ西南ノカタ名越村ナル王墓ヲソ
日本紀古事記延喜式寛平熟田縁起等ニミエ
タル能褒野墓ニシテ更ニ異論ナキモノヲヤ

右日本武尊能褒野墓勘註如件

明治十年十二月　　六等屬大澤清臣

平面之圖
如此キハ何レモ階塚也
穿女ヵ坂

平面之圖

側面之圖

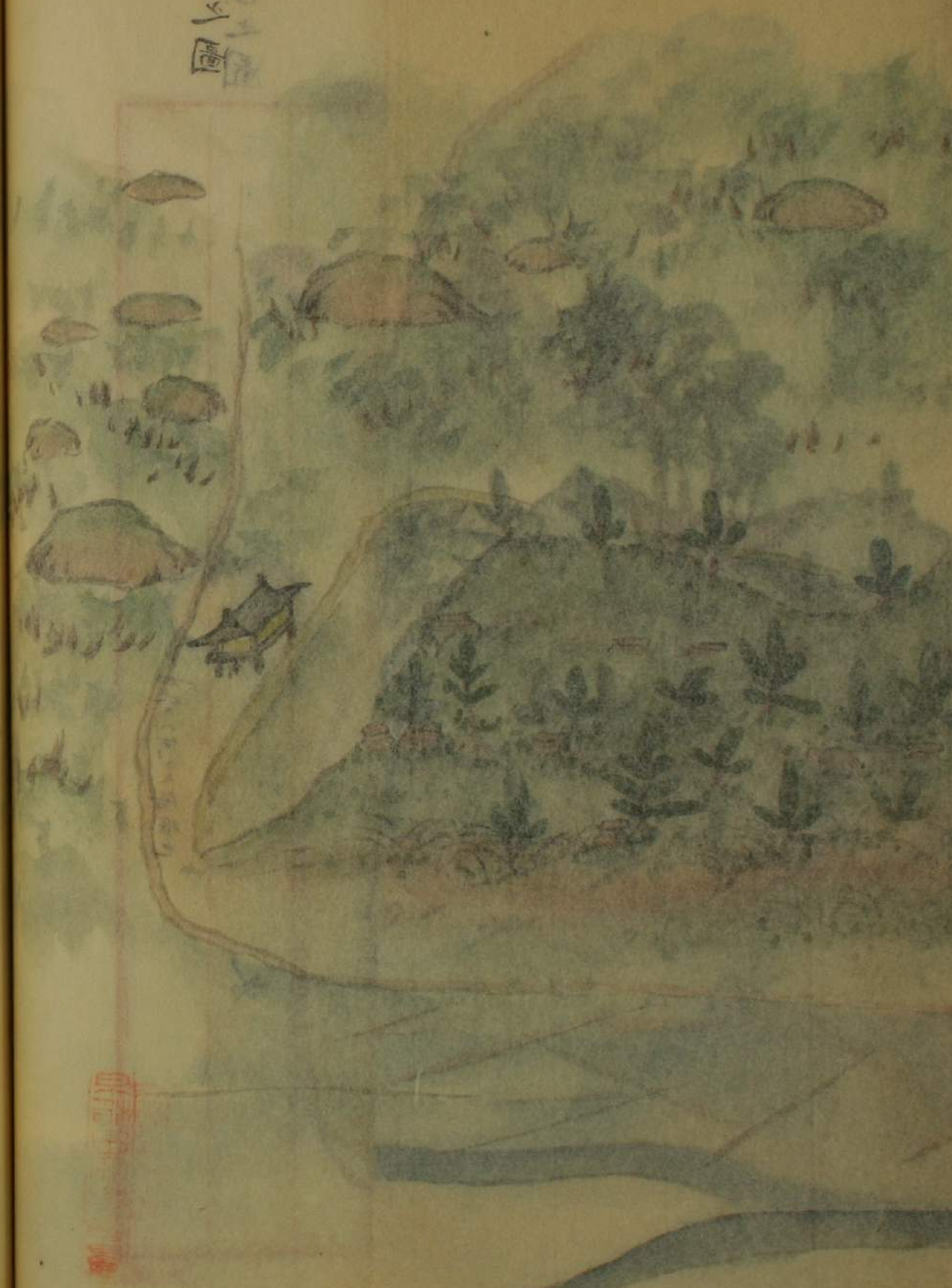
平面之圖

側面之圖

□陵下日本武尊能褒野御墓之儀名越村字□□□

□□□□之方御陵□□可有之ト建議之者有之付

陵面之圖



長野御墓之儀名越村可有之ト建議之者有之付

第三印

社寺局
第七十
五号
内

當縣下日本武尊能褒野御墓之儀名越村字丁子塚（一名王塚）之方御實蹟ニ可有之ト建議之者有之付テハ地方ニ於テ右等之傳說有之候哉徵証ニ備フヘキ書類モ候ハヽ精細取調至急御報可申旨元教部權大丞ヵ御依頼ニ付至急取調之儀所屬戶長及相官掌被相達置候處何分徵証ト備フヘキ書類等無之次第ニ付夫是遲滯之處再應御催促ニ付督達ニ及ヒ候處漸ヶ別紙寫之通傳說書并繪圖面差出候ニ付右ヲ相添此段及御回答候也

明治拾年三月十七日

閲

三重縣令岩村定高

三重縣令
岩村定高

内務省社寺局長

少書記官 足立正聲殿

第六大區二之小區田村地之内ニ有之
古墳取調之件ニ付上申

田村地内名越里字女ケ坂明字王塚古墳ハ
日本武尊御墓ニ可有之建議之者モ有之趣ヲ以
テ取調方之儀數回御達ヲ蒙リ奉拜承候依テ祠
官掌トモ協議百方取調仕候得共何分徵證ニ備
フヘキ書類等無之傳説等モ空説ニ渉リ據ルヘ
キ處無之候乍去該王塚ト唱ル古墳ノ近傍ニ之
アル數十ノ小古墳中ヨリ種々ノ物品ヲ堀出シ
タルヿニ據テ思考スルハ尋常ノ古墳ニ非サル
事顯然タリ然テハ御實蹟ト見込建議候人ヲシ
テ實地御取調相成度此段上申仕候也

第六大區二ノ小區

副戸長 小川潔見

戸長 天野遠謨

明治十年三月十日

副區長 鈴木公充

明治十年三月十三日

三重縣令 岩村定高殿

王塚之儀上申

第六大區二之小區伊勢國鈴鹿郡

田村

字女ヶ坂

一王塚

右塚之儀者往古ヨリ日本武尊御陵ト申傳エ居其所謂左ニ申上候

或説ニ往古景行天皇之御代東夷朝旨ニ叛ク依之皇子日本武尊之レヲ御征伐被為在御歸洛之砌近江國伊吹山ニ大蛇有リ國民ヲ害ス又是レヲ退治シ玉フ時ニ其毒氣被為當給ヒ御心不例時ニ天人下テ都ニ送リ奉ラントト

云テ當村北ノ入口マテ送リ奉ル茲ニ樵夫居テ
奉逢故ニ天人尊ヲ樵夫ニ預ケテ失ス其行衛更
ニ不知其處ヲ今ニ小天宮ト云テ小社ヲ建祭祀
ス其時樵夫尊ヲ當村長瀬山東光寺ニ迎ヘ仕ヘ
奉ル然レ𪜈猶御心不例終ニハ崩御時ニ御供之
人々御陵地ヲ大和之方ニト云テ當村之未申之
方江奉葬即チ今之王塚是レナリ
但シ前件之東光寺ハ天正年中ニ廢絶ス其
跡今民有之宅地ト相成居候
一或説ニ日本武尊崩御ノ後チ都ヨリ后及ヒ御
子等下リ來給ヒテ御陵之前ナル坂ニテ日夜
歎キ玉フ其處ヲ今ニ女ケ坂ト云フ其時尊ハ

御陵ヨリ白鳥ニ化ケリ飛出玉フ故ニ御陵ヲ
堀穿見レハ御衣冠ノミニシテ御骸ハ不在依
テ其跡ヲ追行給フモ云
一或説ニ日本武尊ニ奉仕セシ樵夫江後ニハ官
廳ヨリ田地ヲ給フ永ク御陵之守ト定メ玉フ
𪜈云其田地今ニ王田ト云傳江リ今考ルニ王
塚組トテ右塚之近傍ニ五六戸本郷ヲ離レテ
有リ是レ則チ其樵夫之後裔ナルヘシ
一或説ニ此塚之由緒類東光寺ニ所藏セシヲ天
正年中之兵火ニ罹リ焼失ス僅ニ殘ル処之書
類ハ隣寺長明寺村之長明寺ニ預ケシニ右寺
モ同ク兵火ニ焼失ス時ニ其住職僧右書類ハ

大切ナル物ト云テ其寺中ニ有之藥師堂之下
土中ニ埋メシ由又其藥師ヲ籠藥師唱ヘテ張
籠之像之其像中ニ隱シ入ルトモ云
一慶應元年三月當村王塚組之内坂伊三郎ナル
者畑中之小塚ヨリ堀出セシ小キ玉ヲ得タリ
持歸リ里人ニ語ル里人寄集テ見レハ皆何物
ナルト曰フ事ヲ不知唯貴キ品ナルヘシト云
ノミ然ルニ何人之云初メタルカ勾璁ナリト
風聞セリ今其玉ハ隣村原村佐藤邦光ナル者
所有セル由ナリ
右塚原由取調申候處往古ヨリ申傳之儘ニ
テ前件之通上申仕候以上

右村用掛　藤田治郎作
小前惣代　古田又平

三重縣令岩村定高殿

第六大區二ノ小區田村
王塚之儀上申ニ付進達添書

別紙之通圖面相添差出候ニ付添書ヲ以
進達仕候也

明治十年三月十三日

右區

副戸長　小川潔見

戸長　天野遠謨

副區長　鈴木公充

三重縣令岩村定高殿

第四仰

日本武尊御陵来詳有之今報

教部省官員

御管下古老之見

別帳忠樣ハ書

来

提出提議八明石

特旨及右二門元

之上書之通

書寫差上申

第六大區四之小區鈴鹿郡長瀬郷能褒野

長澤村

第六大區四之小區鈴鹿郡長瀬郷能褒野

上

長澤村

第六大區四之小區
鈴鹿郡長瀬郷能褒野
長澤村

日本武尊御陵未詳有之今般
教部省官員御巡視被為有候ニ付當
御管下古老之見込モ有之候ハヽ貴賤之無差
別不憚忌禱以書面ヲ可申上樣御布令之趣
奉敬承右ニ付去ル明治三庚午年七月度會縣學
授教授職八羽石男元津縣管轄三重郡東坂部
村館友右エ門元亀山縣官員中立奇實地檢査
之上書立ヲ以同縣旧知事矣ヨリ神祇官江差上
候寫壹通并繪圖面別紙之通相添進達仕候
以上

壬申九月

三重縣
御廳

長澤村旧神官　田上重通　印
同村副戸長　羽田收藏　印

第六大區四之小區
鈴鹿郡　長澤村

一當村能褒野長瀬郷ヶ申ハ
一產神延喜式内長瀬神社ニ御座候
一長瀬神社ヶ九三丁程南ニ當リ田地中
（長三丁中巾三丁）そうど塚ヶ申傳ハ塚有之尤此辺ハ
地字そうどヶ申ハ此ヶ塚ヘ差障ル事ヲ忌崇リ
有候ニ三十年程已前當村松井長右エ門下男
他村ヨリ抱ハ者ニ而其儀不存塚ニ農具ヲ當テハ
処俄ニ足痛致殊ニ外ナヤミ又去ル巳年當村
澤田長六ヶ申者此塚岸ニ田地ヲ作リ塚ニ
草木立毛ニ差構ヒハ故田岸ニ草苅取是モ

俄に總身痛み申し神官ヲ頼み斷み祈願し無
程快氣致し事ち座し
一うと塚ゝ武拾間斗北西ニ坪の内ヲ申田
大小三まち程有之ゝ又塚ゝ巽之方ニ字釘
ぬきヲ申田地ち座し
一長瀬神社ゝ五丁程北ニ武備神社境内武
丁四方寶冠塚寶將塚ち座し猶又古塚
有之ゝ是ヲ從古来ち陵ヲアガメ来り領主ゝ
も境内地并ち供料高五石八月十六ヲ祭禮
代差ち座し此節石藥師村產子同樣差
詰致し取持申し此節神酒并配札仕し
一田畑字名　うえの すくろ　一ノ坪　寺田

櫻の木坪　宮の西　宮の北　宮の東
宮の前　とうど　ちうしゆ田　えうど
つるのうち　ちうきん　釘ぬき　やるぎゝ坪
まるいづの　あるまぶいと　うぐいと　ませがいと
ひう堀　ちうの外　くるぶいと　うぐとさ
一當村北東の入口を　いげの口と申

一二子塚石構ハ之口ノ方ハ四五間隔テ大
石有之此石生塚ヲ蓋石ト申傳ヘハ尤當
地ヲ山辺故石澤山ヲ地ニ而石土モ多分入込
ハ得共右之石有割不申ハ処年限ヲ確
ト覺不申ハ得共今三十年斗已前伊丹
村ニ谷口惣左衛門ト申者有之百姓デ作有
山氣有之仁ニ而伊州ノ石工ヲ抱ヘ諸方ヲ仕
事ヲ為致自分ヲ無學ニ而過半馬工ヲ稼ニ
仕石工ヲ伊勢ヲ者故右石之譯ヲ不存別
而地面自他之境界モ不弁右石何歟細工
ニ取掛リハ由然ル処惣左工門并ニ家内大勢
至急煩付同人姪ノ家内大勢相果中ニ

一旦絶ニ相成ヒ事ニ候ハヽ

白鳥陵私考建白

第一大區五之小區三重郡東坂部村

十五番屋敷居住

農　館友右衛門

日本武尊御墓未詳ニ有之今般
教部省官員御巡視有之付
御當郡管下故老之見込も有之候ハヽ無
貴賤之差別不憚忌諱以書面可申上様
御布令之趣奉敬義臣因謹案ニ
倭武尊御陵ハ鈴鹿郡長瀬郷能褒野之内
長澤村長瀬山深廣寺之西二丁十三間計
ニ土俗二子塚ト称シ古ヘ石構ノ口顯レタル必其

御陵也

古事記中巻（景行天皇御段）云倭建命到坐尾津前云々自其地幸到三重村之時云々故号其地謂三重自其幸行而到能煩野之時云々竟即崩介貢上驛使於是坐倭后等及御子等諸下到而作御陵

日本書紀第七巻（景行天皇御段）云到尾津云々逮能褒野而痛甚云々既而崩能褒野時年三十

大日本史（景行天皇十三年）云日本武尊帰至伊勢能褒野而疾獻俘虜於神宮使吉備武彦奏捷京師尋薨

記紀史共能褒野卜而已ニテ探リカタシ

熱田大神寛平二年縁起云倭武尊體中不豫欲歸尾張便移伊勢到尾津濱云々逮于能褒野異常委憊云々既而過鈴鹿山病痛危迫故歌曰云々渡鈴鹿河中瀬忽隨逝水（謂崩也）時年三十仍號其瀬曰能知瀬（能知者命終之詞也）今改為長瀬訛也云々仍葬伊勢國能褒野時倭武尊化白鳥從陵墓出指大和國而飛去云々

延喜諸陵式云能褒野墓日本武尊在伊勢國鈴鹿郡兆域東西二町南北二町守戸三烟

依ニ右等之文臣因考ニ探其地ニ抑武尊ノ
御道筋ハ尾津ヨリ溝野村志知村坂部
村能褒野ト過玉フヘシ次ニ鈴鹿山者鈴
鹿郡之山ヲサシテ廣ク云ヘシ鈴鹿
川モ同郡ノ川ナレハ今此二子塚ノ南百間
許ニ流ルヽ御贄川ナンヘシ鈴鹿ノ号ハ尊
ヨリ後世ノ名ナレハ別ニ云ヘシ長瀬ハ鈴鹿郡
ノ郷名ナレハコレラ以テ臣因案スルニ長瀬ハ
中瀬ノ訛ナラン又長澤村ニ延喜式内長
瀬神社坐セハ此長澤村ハ長瀬ノ本郷
ナルヿ必セリ則此村長瀬郷長瀬庄トモ
古ク傳ヘシ由其村ノ享和三年ノ書上ケ

アリ又同村長瀬山深廣寺ニ惠心僧都
ノ筆古像アルニソノ署名ヲヨク見レハ
長瀬山白鳥院トアリ又寶藏寺ト称ス
サレハ二丁十三間斗西ニ二子塚アレハコノ二
子之称ハ同胞雙生故號二子曰大碓小
碓也是小碓命亦名倭武尊トアレハ此
二子塚ト古ク云傳ヘケルコソヨケレ亦此塚
ノ東南ニ屋敷跡三ツ在是心守戸三烟
ノ蹟也依之臣因案スルニ今其屋敷圓
滿寺持真福寺持深廣寺持ノ地是則
守戸三烟三菩提所ナンヘシ然其裔胄
亡セシニヨリ右三箇寺ノ持地トハナレルナ

ルヘシ深廣寺元長瀬山白鳥院寶藏寺
トテ天台宗ナリシヲ惜哉寛正二年真宗
高田派中興真慧ニ帰依シテ寺号ヲ深
廣寺ト改シ由ナリ
伊勢國風土記云寶藏寺寄田三十二丸六字
田　文武天皇大寶二年四月道照和尚開基也
是則此寺ナルヘシ又此二子塚ヨリ十丁計
北ニ武備塚ト云ハ是ヲ中古倭武尊ノ御
陵ト思ヒ定メケレ事モアリケル由社家ニ
イヘトサニハアラス是正シク大伴武日ノ
塚ナルヘシ又長瀬神社ノ近邊ニ御門釘
貫坪之内鳥居道高燈籠ナト云地字存

セリコレ亦考ニ備フルモノナリ又本居翁
ノ記傳ニモ抑此二子塚ハ正シク上代ノ貴人
ノ墓トハ見エタリト迄ハ書レタリサレハ白鳥
陵ハ此二子塚ノ外索ル処ナカルヘシ
右之通不顧不肖奉建白候以上

第一大區五之小區
東坂部村
館友右衛門 印

壬申九月

三重縣
御廳

前書之通申出候ニ付奥書を以
進達仕候已上

戸長
館小十郎 印

宮内省

明治三庚午年七月從舊知事矦進達ノ寫

宮内省

明治元年九月支配地式内神社取調書

上候節　日本武尊白鳥陵之御儀茂同

様奉申上候其節之儀者急卒ニ而實

撿茂行屈兼候處此度度會縣管下式社

為取調同縣學校教授八羽石男就巡村

當藩役人差出同人素説茂承合セ乃於

實地遂査照候其説ニ

古事記中巻景行天皇ヨ云々故還下坐

御段

之到玉倉部之清泉云々然今吾足不

得歩成當藝斯形云ヽ故号其地謂當

藝也因甚疲衛御杖稍歩故号其地謂杖

衛坂也到坐尾津前云ヽ自其地幸到三

重村之時云々故号其地謂三重自其幸行
而到能煩野之時云々竟即崩云々
當藝ハ美濃ノ郡名ナレハ杖衛坂ハ其地
ニアルヘキヲ今三重郡ノ采女村ニアルハ三
重ノ号ヲ風トアヤマルヿ三重ハ此一郡ノ
内ニアルヘキナレトソノ地今ナシ抑武
尊ノ御道ハ尾津ヨリ正南ヲサシ玉ヒシ
ヿ疑ナケレハ東方ノ采女村辺ヲ過玉フ
ヿナレ仍テ古事記ハ混文アルヿ然ルヲ
記傳ニハコレタスケテイハルレトサテハ美濃
ニテ太ク腫玉ヘル足ニテ采女村マテ御杖ヲ
用玉ハヌヿト成テイトヽイカヽヿコレニ

隨テ笠縫トイフ地ヲ設ケソコナル小山
ヲ陵ヿトイフモ共ニイカヽナレハトルニタラ
ス

日本書記第七巻同天皇御段ヨ云々乃飲其
水而醒之故号其泉曰居醒泉也云々到尾
津云々逮于能褒野而云々既而崩于能褒
野時年三十歳云々因欲録功名即定武部
也

記モ紀モ共ニ能褒野トノミニテ探ヤキ方ヲシ
ラス

寛平二年熟田大神縁起ニ云々居山下泉
側乃飲其水而覺醒故号其泉曰居醒泉也

云々便移伊勢到尾津濱云々遂于能褒
野吳常委惙云々既而過鈴鹿山病痛
危迫云々渡鈴鹿河中瀬曰能知瀬本住能
知者命終之詞也今改爲長瀬訛也云々
此文ニヨリテソノ地ヲ探ルニマツ長瀬ハ鈴
鹿郡ノ郷名ナレハソレヲ求メテ長澤村ニ
長瀬山深廣寺トイフヲ得タリソノ寺ニ惠心僧
都ノ古像アルニソノ署名ヲ日光ニ照レテヨク
ミレハ長瀬山白鳥院寶藏寺トアリサテ此
長澤村則長瀬郷ニテ長瀬郷トモ長瀬庄
トモ傳ヘレ由其村ノ享和三年ノ書上ケニ
アリ又長瀬神社モソコニ坐セハ長瀬郷ナン

丁ハ明之又今御贄川トテ此村ノ南ヲ
流ルヽハ鈴鹿郡内ノ川ナレハ則鈴鹿
川ニ（今ノ鈴鹿山鈴鹿川ハ後世ノ新地ナレハコヽニ用ナシ）其村ノ西ナン
彼白鳥院ノ二丁十三間計ニ二子塚ト
イフアル必ソノ御陵ニ（添テ奉ル繪図面ノ如シ）然レハ
此二子塚ノ北ナン武備塚トイフハ日本書
紀ナル武部ノ農民ノ祖塚ナンヘレ武尊
ノ男健ヒマシテ崩玉ヘルユエンカラ号セレト
ソノ社家ノ旧記ニイヘド崩ノ件ニハ男健ヒシ
玉フ御形勢ハサラニナレサテ又珍ラシキ
丁ハ此御塚ノ東北ノ地ニツヽキテ人家三烟ノ
屋鋪アルハ必守戸三烟ノアトナルコト明ナ

ルハ坎二子塚ノ外ニ素ル処ナレ
右八羽石男所説ニテ明證顕然相成候ニ付
則繪圖面之通草木苅拂御巡り之御垣御
花表等不取敢仮ニ結定メ清被令仕奉候
此上處置之儀宜御指揮可被下様奉伏願
候以上

庚午
七月

神祇官
御中

亀山藩知事

日本武尊御墓如別紙奉申上候明證
相立候上者御祭式等之儀者追々御
指揮可被下候得共先不取敢別紙以祝
詞聊供奠物御祭式奉仕不苦儀ニ御座候
哉奉恐入候得共坎段奉伺候以上

庚午七月

亀山藩知事

神祇官
御中

第五印

寫濟

九年七月十五日

考證課　小中村清矩

小中村　渡邊

伊勢國鈴鹿郡能褒野墓所ニ考勘ニ付

右之年諸陵寮ノ官員巡視ニ付高宮村ナル白鳥塚ヲ以ル墓ト確定シタル趣ハ上申ノ裏検勘註ニ詳カ也　然ルニ大阪清住ハ名越村ナル王ノ墓コソ実績ナレトテ證案ヲ挙ケテ建議シ若干ノ論辯ニ及ヘリ今此両説ヲ通考スルニ高宮村ナルハ先輩ノ考ヘ有テ信人ノ意ノ大方帰スル所也　名越村ナルハ大阪氏ノ妄ノ説ニテ白鳥陵也ト断シタル古カラ塚ノ状ノ前方後圓ナルト数年ノ陵墓アルヲ思ハヽ臆説トシテ却ケ難シ抑諸陵官員

宮内省

ト大澤氏トハ共ニ実地ニ就キ推敲ノ力ヲ尽シタン者トミエンヲ今只雙方ノ筆記ノミヲ見競ヘテ容易ニ可否ヲ決セン事ハ輙生等ノ力ノ堪ル所ニアラスト存ジ也

第六印

日本武尊能褒野墓再考

宮内省

ト大澤氏トハ共ニ実地ニ就キ推敲ノ力ヲ尽シタル者トミエンヲ今只双方ノ筆記ノミヲ見競ヘテ容易ニ可否ヲ決セン事ハ輒生等ノ力ノ堪ル所ニアラスト存ジ也

能褒野御墓ノ勘注ト大沢氏ノ説トヲ合セ見ルニ其説ノ孰レカ當否ヲ知ラズ因テ其是非ヲ言フ能ハズサレド旧友ナル石上神社大宮司菅政友翁ヲ書ヲ贈テ云フ日本武尊御墓高宮村ナル ヒヨトリ塚モ形疑ハシケレバ今郡係中石薬師駅ノ日ノ坪ヲモ一見イタシタレド是モ疑フ皇子ノ陵墓ナラネバ論スル迄モナシ名越村ナル丁子塚此ハ亀山駅ヨリ北一里半許ヲ隔テ御幣川ノキハニアリ総テ此辺ヨリ高宮村ニ沢村等一面ノ野ニテ名越村ハ其南ノハシニアリ御幣川南ニ流レテ御墓ハ遠クヨリ見ユルナリ前ノ後園ナルガ東ニ向ヒテ長サ凡一丁許リ古事記伝ニ記シタル如キ小ナルモノニアラズ御墓ノ周囲一町或ハ二町ノ間又ハ三町斗ノ間或ハ二間許ナル墓十餘ケ所散在セリ土人ハチャウシ 丁字トハ云ハズ 塚ト云ヒ又王墓ト云ヒ処ノ地ヲモ王墓ト呼ヒ由ナリ御墓ノ大ナル又前方後円ナル王墓ト云ナド小生ハ高宮ヨリハ此御墓ヲ皇子ノナリトハ思ヒナリヌ上ト又吉月中ノ書簡ニ諸陵課子安氏ニ面語ノ節能褒野ノ陵墓ハ如何様確定ナリシヤト承リシニ ヒヨトリ塚ノ方ニ確定セシ趣故愚説ヲ陳ルニモ及バズシテ止タリキト云遣サレタルヲ思フニ大沢氏ノ説ト粗合ヘルカ如シサレド其得失是非ノ如キモトヨリ陵墓ノ古制ヲ親シク目撃セシ人ナキ者ノ云フベキ所ニ非ネバ聊カ旧友ノ説ヲ挙テ参考ニ備フ

第六仰

日本武尊能褒野墓再考

宮内省

能褒野墓再考

日本武尊ハ能褒野墓ハ伊勢國鈴鹿郡田村領のうち名越村の管内あさふ女ヶ坂とよへる小徑の傍ヨ所ゐる古墳こそふり塚のほさふを丁子冢とも王墓とも云ふ高サ二丈七尺許四圍九十六丈許の大きさ又て前のかゝ方ヨ後のかゝ圓く土壇を列ね埋こて東面ヨ築上こりまゝ四周の隍のあとも堤の跡もさふのら存ゐり（前稿ヨ隍ハ四方ヨ囲らさるよしヨ云ひしハ荊棘ヨかくきてゝ見えさりしからの誤ふ）り塚の前面ヨハ小松雜木生茂ゐ後のかゝの頂上ヨ徑一丈八尺許深一丈五尺もの穴窪ある所あり此ハ

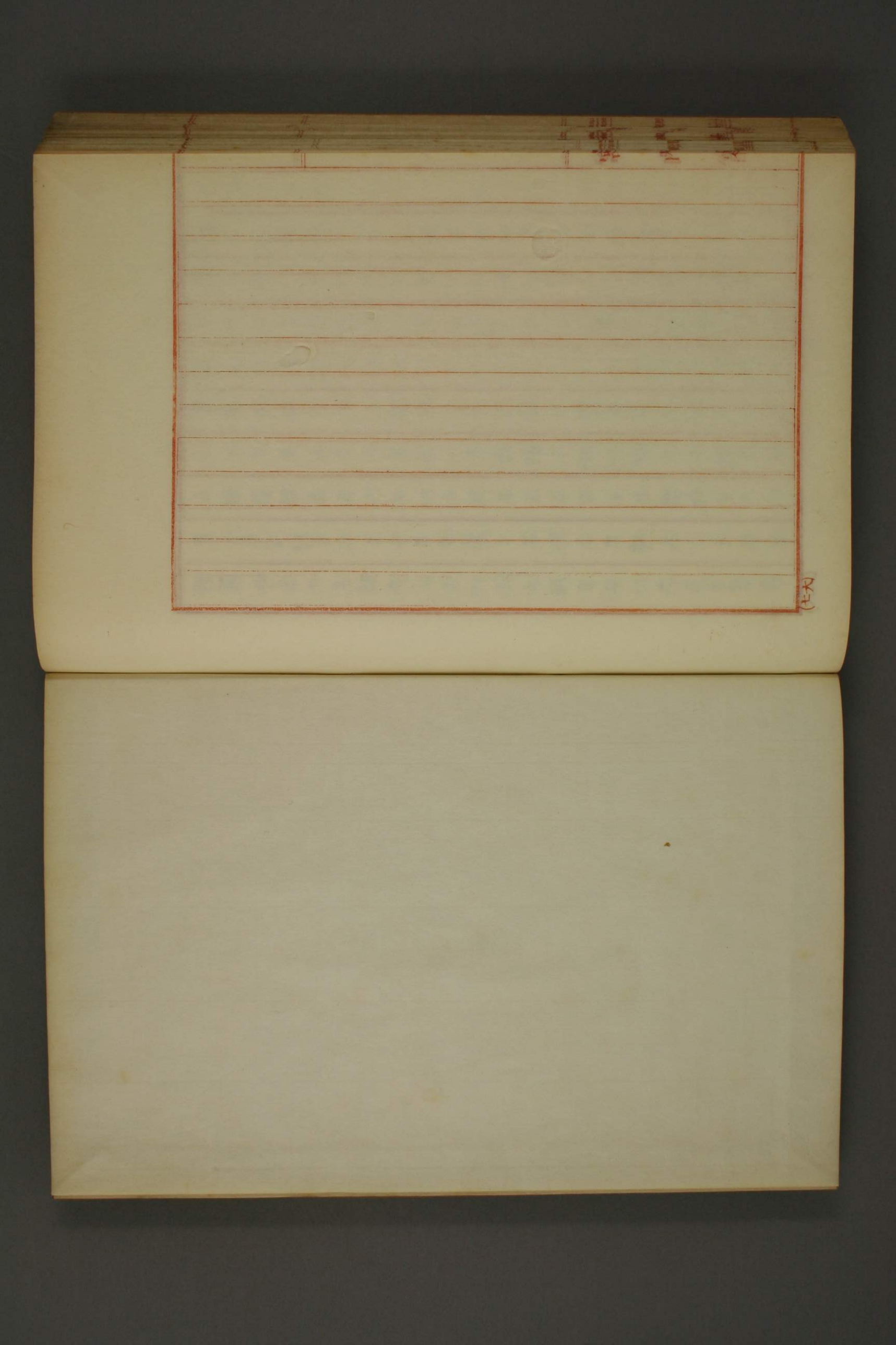
他の古墳の發掘きこるは考合するは御在所の石槨の崩きてかゝる狀はふれるものなり里老の口碑は日本武尊を葬るこてまゐりし御塚ふりといへるハ由をはさることゝ叫るへくれえこり其ハ塚の前ふるゝ徑のほさふを女ゝ坂とよへるハ古事記は於是坐倭后等及御子等諸下到而云々とこえこる故事は思ひほハをらき其塚の數地の南方一圓田地ふるも古事記は作御陵即匍匐廻其地之那豆岐田而哭為歌曰那豆岐能多能伊那賀良迩伊那賀良迩波比母登富呂布登許呂豆良とこえこるふ其地理いとよくかふ

へれハ那豆岐田ふ寛平熱田縁起は渡鈴鹿河中瀬忽隨逝水云こ仍號其瀬曰能知瀬能知者命鈴之詞也今改為長世訛也とこえこる鈴鹿川も其冢の南のうこ三町許は流るゝ御贄川はあこきり（いま関宿亀山宿等の南をふるゝ川を鈴鹿川といへる）ハ其をふもと鈴鹿郷鈴鹿山より出るふるれ叫きハさるをふるへく聞えこきといまゝへ左のようひゝハ此川をさせるはあらさるとかの熱田縁起はいへる趣まていちしるし

あこその中瀬といへるハ當郡中は水流數條あるて其中流はあこれるからの称ふるへゝまこ其郷名の長瀬の称も近傍數所は猶此こまて何ふも古書にをえこる趣はあふへるふこ其塚の東方より北のかこ西のあこは鏡ふて

十餘の陪冢散在せり其なかを王の子冢とよへる
かゝる陪冢はかくの如き御墓まはあらにあるへ
き當時の例まてれらこふこの丁子塚ハ能褒野墓
まなこれる確證ハり然るを明治六年まを巡視せる
教部大録故山内時習まと權大録ふりこ猿渡容盛ら
ゝ高宮村の笠殿山の笠殿祠の後なる丸山一名白鳥冢まこの
名ひまとり冢とよへる古墳を能褒野墓と斷決こて勘文を
上申せこまをて終まに其處まを定まれり然れとも其
古墳ハ一名丁抜白鳥冢とも云ひてかの白鳥の故事
まを由緣あるを如くまを聞ゆき其墓制まいとりてハ高

三丈許周囲六十六丈前編まを百四十間許と志ろきこハこのへり許の大き
さまこて全面まを黒きふ石を敷こるものふきと其を
とち円墳まて當時の制ふる前方後円まもあらにも
とより四圍の隍も備ハらさるのこふらも古事記まを
作御陵即甸冨廻其地之那豆岐田とこえこるまを據る
まを近きあこりまのふらに若干の田園あるへきハる
を昔時より志のなりけむと思ハる丶所ふくいま冢の西麓
の谷間まこつのむこのりの田地あれとも東西二町南
北二町の北域の内まをあこきゝも昔時よりありこゝ
ものまあらにむこ墓畔まを陪冢ハともちらまを見らにあこ熟
田縁起まを據るにちのきあこりまを鈴鹿川のなのれハ

くてハその外ハさるゝとゝ叫るをこれも志このふらむと
思ハるゝ所ふ〳〵くハふるゝ高宮村近傍の村々ハ
そのかゝ高宮郷のうちゝて高宮ハ其舊名の殘ゝの
これるものなれハいまゝ〳〵への長瀬郷の地ゝあらさ
るゝともいゝとも志るゝ〳〵これらゝふ此白鳥冢ハ能褒野
墓ゝあゝらさる明徵ふりそもゝ〳〵能褒野の古名ハ今
ハゝえてのこらされとも先輩の説ゝ據るゝ鈴鹿郡
の北邊方五十町むありハゝふ其野の域内ふりされと
其あゝりゝ上ゝいふ丁子塚の如く其體狀そふハりつゝ其地
理のかふへるハさらに比類ふ〳〵とそこれこの能褒

野墓ふるゝと疑ふ〳〵といふも强言ゝハあらそこの〳〵
まゝ長澤村ゝなさふ二子冢とゝへる古墳ありそれを
も能褒野墓ふりといふ説あるゝよゝて其地ゝもい
ゝりて見ゆるゝ其冢ハ長澤村と伊船村との境ふる
芝原の地ゝいゝと崩きゝる圓墳三個あふるをうち見
るゝハ二個の如くゝゝゆるからゝ志ゝのゝひふをる
もゝゝて其狀いゝ卑ふゝ〳〵てつゝ前方後圓環隍の築
造ゝならされむ當時の墓制ゝこのふハさることもゝと
より分明ゝてゝゝ論そるかきりゝあらそ